

潮ノ目

前篇

唐神一樹

ひとり坐す 幽篁の裏

琴を弾き 複張嘯

深林 人知らず

明月 来つて相照らす

私はただひとり、奥深く静かな竹藪に坐る。

琴を弾きながら、詩歌を詠う。

深い林のことだから誰も知らないであろう。

ただ明月だけが訪ねに来て、照らしてくれる。

菊ノ間

『浮上まで 残り60秒。』

時間は、重要じゃない。一息ついて心の中で文句を垂れる。音声指示に従って、足元におろした大福の箱から離れないといけない。深く息を吸い込んで、つかれた老体の隅々まで気合いを入れる。そして、皺が刻まれた手を両膝においてから、無駄のない動きでスツと立ち上がった。歳の割に全身の関節はなめらかに動くからありがたい。軽く振り向いて後方の足元を確認しながら、ゆつくりと後退していった。十歩ほど離れてから、軽快な通知音が鳴り、音声が続いた。

『座標周辺の安全を確認。』

あとは、浮上までの手順が進んでいくのを待つていればよい。視界の真ん中には、縁が

肩幅ほどの箱が、曇天の下の草むらで静かに佇んでいる。箱の表面は鈍い白色を反射して、草むらの中でひどく奇妙に見えている。これはヒトが肉眼で認識しやすい様に、周りの環境を解析して、目立った色へと変化する機能によるものだ。晴天の下の草むらであれば、真珠のような輝きを放つのだが、あいにく陽の光は分厚い雲の上だ。

『浮上まで、残り30秒。形態移行を開始します。』

浮上には何度も失敗している。大福は地上で採集された物を、上空で巡回しているバールンクラフトに収容、回収するための次世代型気球コンテナとして開発されている。飛ばして回収するだけであれば、二十世紀のアメリカ空軍が開発していた、フルトン回収システムに倣って容易に実現できる。しかし、箱の中に収めた採集物を損傷なく回収するのに、様々なトラブルに見舞われている。失敗した回数を数えるのはやめた。

『フロッター、展開。』

箱の表面が膨らみ、大福らしい姿へと変貌していった。ここからは毎度のごとく緊張が

走る。静かな動悸に今回こそ成功してほしいという意思がのっている。期待はするなと心を落ち着けようとするが、そもそもこのような感情の起伏さえも問題ではない。失敗すれば課題があらわれて、修正する。これ繰り返し続ければ、いずれ必ずうまくいく。開発しているのは私だけではない。だから時間は重要じゃない。

『形態移行完了。遊離まで6秒――、4、3、2――。』

音もなく地上を離れた大福は、風に煽られながらゆらゆらと空に登っていった。ここまですべて順調に進んだことを喜びたいが、温度や気圧の変化、バードストライクから箱を守らないといけない。ここからは人工知能制御だから、大福の状態変化を手元の無線端末で確認しつつ、回収の無事を祈るしかない。

そのへんの芝に腰を下ろしてしばらくすると、無線端末から音声が流れた。

『こちらDI、全機応答せよ。』上空の大福が喋った。今更、驚くほどのことではない。

「ピーク2、高度10,000フィートの雲中にターゲットシグナルDIを確認。」

「ピーク4、ターゲット回収エリア外を飛行中。」

「ピーク3、高度30,000フィートにて待機中。」

「ピーク1、高度60,000フィート、成層圏にて待機中。」

上空では、四機のバルーンクラフト（BC）が待機している。バルーンクラフトは、通常時、テイルローター方式の飛行艇として運用されるが、上空や高高度では大福のように、機体上部に格納された気嚢を膨らませて、大気中で浮力を得る飛行船に変形できる。上空で膨らむ様は焼いた餅のようで、『ヤキモチ』と呼ばれている。

『こちらDI、これより、『大福』の集荷テストシークエンスを開始する。なお、本テストは高速輸送のため、『蜘蛛の糸』を使用し、現時刻から十分以内のステーション収容を目標とします。』

全機が応答し、雲の上で回収作業が始まったようだ。エアクラフトの気配も飛行音も無

く進行していく。頭上に四機と大福が飛んでいるというのに、この静けさは寂しいものだ。

「ピーク2、D1を肉眼で補足、降下後、確保する。ピーク3、ピーク1に『蜘蛛の糸』の射出を要請する。」

了解の合図と共に、モーター音が聞こえてきた。数秒後にノイズキャンセリング機能で端末の音声は途絶えたが、今は大福を釣り上げる糸を、電動リールで下ろしているのだろう。成層圏のエアクラフトから下ろされた糸は、複数のエアクラフトを中継して一本の長い釣り糸のようになる。これで大福を釣り上げること、本来は数時間かけて成層圏まで浮かんでくるはずの大福を、すぐさま釣り上げることができる。しかし、深海から釣り上げた魚が水圧の変化で目玉や内臓が飛び出してしまうように、大福が破損しないかどうか、最大の課題になっている。

「ピーク2、高度8,000フィートにてD1を確保、気囊収縮確認、減圧弁解放済み。ピーク2、上昇開始。」

ここまでは問題ない。今回のテストでは、高速輸送とバードストライクの迎撃機能確認を兼ねている。ピーク4からはすでに鳥型ドローンが射出されているはずだ。蜘蛛の糸の接続や大福の回収を妨害するように、高高度で飛行する実際の鳥よりも、厄介なプログラムで動かしている。テストは最悪を想定して行われた方がいい、今回のシュチュエーションはまだ緩い方だろう。

「ピーク3、高度20,000フィートに鳥の群れを確認、指向性音響砲を出力。糸の接続を『群れ』とコンタクトする前に終わらせたい。」

「焦ることはない。ピーク3、こちらピーク2、糸の接続モジュールを確認した。接続可能距離まで残り300フィート。——接続完了、釣り上げてくれ。」

「ピーク3、一次サルベージ開始。依然として鳥の群れは接近中、音響砲出力レベル、上げます。」

どうやら大福めがけて鳥型ドローンが飛んでいつているようだ。強い音響砲の影響下に

入れば、鳥の群れもたまらず迂回するだろうが、あまりに出力を上げて、平衡感覚を失った鳥が墜落してしまうようだと困る。頭上から落ちてくる鳥に当たっては怪我じゃ済まないだろう。できれば穏便に済ませて欲しいものだ。

『こちらD1、群れの一部が警戒エリア内に侵入、防護システムにより迎撃します。ピーク2に撃墜した障害物の回収を要請。——こちらD1、迎撃エリアに入った障害物を3個体排除、落下物が高度3,000フィートに到達する前に回収してください。』

少し面倒そうなピーク2の音声が端末から漏れてきてから、ピーク3が応答した。

「ピーク3、D1の引き上げ完了、蜘蛛の糸の二次サルベージに移行します。——糸の交換完了、釣り上げ可能です。あとはピーク1、お願いします。」

「ピーク1、了解。」

騒がしかった端末の音声もしばらくの間、沈黙を守った。5分ほど経っただろうか、

ピーク1からDIを回収したとの通達が入った。あとはいかに早く、成層圏を飛行する巨大航空貯蔵船GAS (Giant Aerial Storage) まど辿り着くかだ。上空には地上からはモニターできないが近くに何機か飛んでいるだろう。

「えー。こちらGASサンフラワー7号機DD回収班、ネスト射出の要請を受理。コードDIの接続モジュール開放を確認。BCピーク1到達まで57秒。ネスト射出。」

ネストにより、蜘蛛の糸で釣り上げられた大福は、空飛ぶ倉庫にひきずりこまれていく。思ったよりも、ピーク1とGASの距離が遠いようだ。おそらく大福の状態に問題はな
いはずだが、ステーション到達の目標時間には間に合わないだろう。

「DIにネストを接続、収容シークエンスに入ります。GAS内に通達、ステーション作業員は所定の位置にて待機してください。」

再び、退屈なひと時が訪れた。それにしても地上で箱詰めしたものが、上空20kmの空飛ぶ倉庫に集荷するのを、これほどの手際でできるとは、すごい時代になったものだ。表

情にしわをつくりながら感慨に耽っていると、軽快な通知音になった。

『こちらDI、ステーションへの収容を確認。DI内部の採取物、DI本体に異常なし。到達目標を179秒オーバー。以上にて、集荷テストシークエンスを終了します。みなさまお疲れ様でした。ありがとうございます。』

音声が続切れて、端末の表示器にテスト時のログがまとめて出力された。このデータを元に、各機的设计やインターフェースの修正をする。いつも通り、繰り返す。目標が達成できなかったのは、あまり気分のいいものではない。だが、バルーンクラフトも大福も運用するのに、十分な性能まで到達しているのは確かだ。ここから如何に良いものに仕上げていくか。まだ修正したい機能がたくさん残っている。

立ち上がって、着物にひっかかった草を払い落として背を伸ばした。これから寒くなる時期だ。薄着で野山を闊歩できるのもまたしばらくお預けになる。年季の入った素肌で風を感じながら思い切り深呼吸をする。大福の開発も、飛行機と戯れるのも、風と仲良くやらないやいかん。陽はさしていないが、今日も風がいい。端末に鳴かれながら、上空の出来事を思い浮かべるのをやめると、目の前に広がっている清々しい景色に気が付く。足元か

ら、くるぶしほどの高さの草が広がって、夏を超えた立派な緑の林が遠くに見える。ふと意識の奥底に苦い気持ちが生かんでくる。この他愛もない景色とも、あと半生で別れなければならぬのだらうかと。風の心地よさが余計に重くのしかかってくるようだ。ずいぶん長く生きた。しかし、別れはいくら時間が経とうと惜しいものなのだろう。別れに納得することはできそうもない。

おセンチになると、通知音が響いてきてビクリとした。プライベート回線だ。開発に便利だとはいえ、手元で急に鳴かれるのは気が触れる。それも品のないブザーだ。

「おい、一休の爺さん、聞こえてるか。ピーク2だ。」

やかましい声だな、コードネームだと誰かわからない。どこか聞き覚えのある声な気がする。

「おや、先ほどはお疲れ様です。しかし、どうしてその呼び名を知っておいでか。」

「2年半前にビーチで世話になった。あん時の『ディレクトリ』は確か、ミズクラゲだ。」

「おお、思いましたぞ。クラゲの兄ちゃんか。久しく会わないと思ったら、バルーンクラフトに乗っているとは。」

「あの後、資格不十分で海底に潜ったのを、委員会に怒られちゃってな。火星まで飛ばさ

れてたのさ。もう海は懲り懲りで空を飛んでる。」

「そうかい、お勤めご苦勞様。で、いったい何の用だ。」

「いやいや、久しぶりにロケーションが近かつたんだ。晩飯でもどうかと思つてコールしたわけよ。朝どれの甘鯛が手元にあるんだ。どうだい、付き合つてくれよ。」

今日は読みかけの本の続きが気になつていたから、少しばかり悩んだ。観たい映画も溜まつている。

「一休さんよ、どうだい。」

「——甘鯛は何色だ。赤か、黄か、白か。」

「そりや後のお楽しみよ。いいじゃないか。松かさ揚げにでもしようや。」

「ほう、通じやな、下ごしらえは頼んだぞ。」

端末の先に喜びが溢れているのを感じた。それほどなことでもないだろうと思うのだが、うまい魚を食べるとあらば悪くない夜になりそうだ。

「一度、バルーンクラフトを返しに海城プラントに戻る。あとで合流しよう。」
了解を告げて、音声は途切れた。

この世界は、機械文明としての安定した境地に辿り着いた。シンギュラリティは起こった。それは、私たち人類に気がつかれないまま、そつと時代は流れていった。そして機械たちは、私たち人類と、全ての生き物に救いの手を差し伸べた。

かつて私たちは、度重なる歴史の因縁にふりまわされながら、世界は綱渡りをするように何とか進行し、徐々に疲弊していった。そして人類は突如として、世界の変化を目の当たりにすることになる。ある日を境に私たちの物理世界や自然の中に見慣れない機械がありふれていった。虫よりも小さなマシンから、象よりも大きなロボットまで世界を闊歩していた。人間が機械を生み出すのではなく、機械が機械を生み出していた。そしてUEOやUMAが本当に現れたかのように、世界中がパニックに陥った。ついに人工知能の叛逆がはじまり、人類を脅かす存在に成り上がったのだと。

しかし、機械たちは、その制御機構や、人工知能が独自に開発していた技術データを人類に明け渡し、その気になれば機械、自然のスイッチを切ることができると提示してきた。さまざまな形で、機械による最新技術を手に入れた人類はそれを、兵器開発や技術開発に取り入れて、より悲惨な紛争や戦争がおこった。だが、それも長くは続かず、機械自然も戦闘に加担することはなかった。

機械のもたらしした技術の断片は、パズルのピースのように合わり、機械自然の創り出

した技術体系が解読される頃には、地上に戦いの火種は無くなっていた。地球上どの集団も徐々に、戦いの螺旋の中から解き放たれて、新しい時代がはじまっていた――。

とつぷりと日が暮れて、遠くから鈴虫の声が聞こえてくる。大福の打ち上げテストから見えていた草むらにベースキャンプをとのえておいた。焚き火にあたりながら本に目を通していると、暗闇の中から大柄の男がヌツと出てきた。

「どうした爺さん、待たせている間にボケちまったか。」

「それが目上に対する態度か全く、これだから図体も態度もでかい男はすかんだ。待ちぼうけたぞ。腹も空いておるわい。」

「いや、すまない。野望用で時間くつちまつて、この近くの『電鏡』に一報入れておいたんだが。」

「ああ、『虫の知らせ』が届いた。遅くなったことは気にしておらん。ささ、飯の支度をしてくれ。」

「おう、これが今日のメインディッシュになる甘鯛だぜ。」

男は背中の籠から剣を抜くように、50センチもあろうかという赤甘鯛を取り出した。「どうだ！、立派だろう。絶対に美味い。血抜きも寄生虫のパルス殺虫も済ませてるか

ら、生でもいけるぜ。」

「おー、よく肥えているのお、しかし赤ではないか。」

「赤だつて高級魚だぜい。黄色も白もそうは手に入らなくて、今日はこれでいいじゃあないか。すぐ準備するから、機嫌なおしてくれな。」

大柄のわりに柔らかい声だ。前にあつた時もこんな輩だつただろうか。目の前で、調理器具を広げて、無駄な動きなく魚体を捌いていった。できあがるまでしばらくかかるだろうと腰を下ろして、静かに本のページをめくり始めた。

——機械自然は、その名の通り地球の大地や生態系を、機械によつて模倣していた。しかし実際には、模倣するだけにとどまらず、既存の自然環境とも関係性を作り上げ、地上のあらゆる環境に適応していった。砂漠の過酷な寒暖差に耐えられる自律貯水システム、野山の花の受粉を助ける浮遊体。雪崩を抑えることのできる網のような機械群、川辺の石を運び、地形を変えていくロボット。このように、さまざまな機能をもった生命ではないものたちが観測されるようになった。いったいどのようなようにして、発生したのかは現時点でも明確にはわかっていないが、機械自然の個体の多くは有機物によつて構成されてい

た。ヒトを含め、動物たちは機械自然を摂取、消化することができた。そして、機械自然も有機物をその体に取り入れて、自己複製をすることで個体数を増やしていた。

その頃の世界は、ヒトによる物資の輸送活動が活発になってから長い年月が経ち、外来種問題に悩まされていた。数万年、数億年かけて地球が創り上げてきた自然のバランスを人間が数百年のうちに崩してしまった。そこに、機械自然が介入してきたことで、人類は、まさにお手上げだった。すでに、起こっている生物多様性に関する問題に新たな不安要素が加わり、機械自然を利用した紛争が発生して混乱を極めた人類は、ついに多様性の保全という問題を手放した。確実な市民社会の秩序を作り出すために、多様性を少しでも回復することを諦めてしまった。

しかし、現在の世界で、人類が諦めたはずの多様性が実現しているのは、機械自然の介入によるものだった。大規模な干魃や、土壤汚染、特定の虫の大量発生による農業被害が激減して、自然は恐ろしいほどに安定する方向に変化していった。増えすぎた絶滅危惧種のリストは、種の個体数を増やす方向で少しずつ空白になっていった――。

キリのいい場所まで読み進めたところで、いい香りと、シャツと響く揚げ物の気配に意識がつかれてしまった。もうじき食事だ。

「さあ爺さん、用意ができたぜい。甘鯛のフルコースだ。まずは味噌汁、その辺でとってきた野草も入っているよ。次に刺身、腹身の脂が輝いてるだろう。そして、松かさ揚げだ。最高ですよ。飯はどうする、少しでいいか。」

「そうだな、少しもらおう。にしても洒落た盛り付けじゃのう。刺身なんてまるで花のようではないか。いいセンスだ。」

「おうよ、このくらい朝飯前。いや、もう日は暮れたか——。」

ずいぶんつまらんことを言う。でも、豪快に笑って実に満足そうだ。夜の静けさにはこれくらいの雰囲気がかようなのかもしれないな。

「今日は九月九日、菊の節句だ。時代は変わったのに、いまだに伝統を重んじて新暦を使ってるから、九月に菊がさいてないのが残念だな。菊を添えてみましたよ。」

「キザなやつじゃの。こんな芸ができるとあらば、わしの墓参りには、仏花の代わりに、菊を模した刺身盛りでも供えてもらおうか。」

「そんな縁起でもないこと言うなつて。ささ、食べようや。」

姿勢を整えて、合掌している間に、目の前の男がデカイ声で、いただきますと大絶叫したまま、猛獣の如くお椀にかっくらった。品性は空の上に置いてきたらしい。

「いやあ、うまいなあ。」

実際、とてもおいしかった。秋の夜風が吹く中とする食事は、特別美味しい。それに、これからはキノコもとれる。また楽しみな季節がやってくる予感がして良い気分になった。

突然、思い出したかのように男は立ち上がり、調理場に戻ってゴソゴソとし始めた。

「酒ももってきたが、どうだい。」

「私は酒はやらのじゃ。」

「なあに、アルコール分解パッチを使えば酒もすぐ抜けるじゃねえか。せつかく刺身もあるんだし、楽しもうや。」

「そうか、ならば一杯。」

そこからは、愉快でいい時間だった。野郎二人だと気兼ねなくていい。腹も膨れて、今日使った少ないエネルギーも体に補填されたのを感じた。

「しつかし、わざわざ年寄りに会いにきて、ご馳走してくれるなんぞ。何かねだるものでもあるのかね。」

「おお、腹の内がバレちまったか。実はな、つくつてもらいたい物があるんだ。」

男はポケットから、取り出した光沢のある棒を警棒のように引き伸ばし、地面に突き立

てた。地面に突き刺した棒から映像が照射された。私もみたことがない、随分小型のプロジェクターらしい。

「映像を見てくれ、これは次のレースで使おうと思っているエアクラフトの設計図だ。あの程度は自分たちのチームで仕上げたんだが、いくつか課題がある。助言が欲しい。」

食事の時はうつて変わって、鋭い声になった。表情は変わらずとも雰囲気の変化に気圧されそうになった。酒も回っているが、背筋がシャンとして、そのまま設計図を眺めてみた。

「いい機体じゃないか、翼が鎌のようになってる。ハリオアマツバメのバイオミミクリーがベースか。水平飛行には打ってつけじゃな。」

「ああ、次のコースは高速サーキットだ。コーナーが少なく、障害物も少ない。小回りよりもトップスピードの維持を優先しようと思っている。だが、ハッ、クの問題が付きまとう。この機体は平均的なサイズより小さなデザインだ。十分なハック対策のハードウェアを積む余裕がない。」

なるほど。昨今の娯楽になっているレースはパイロットが直接搭乗しない。そして、生命の安全を考慮したレースの制約を取り払った、遠隔操縦による次世代型ドローンレースが主流になっている。おかげで、どんなレースもクラッシュ上等、墜落と故障のオンパ

リードになった。

「出場するのはいつのレースだい。」

「それは教えられない。情報が流れるのをなるべく遅くしたいからね。でも準備する時間は十分にある。」

「このご時世に秘密とは、難儀な物だな。」

「ああ、俺たちはレースにかけているからな。それに秘密を抱えている間は、ヒト科動物としての自覚から逃れて人間様になれる気がしていい。どっかの不憫な文豪が、『人を人たらしめるのは秘密だ』とか言ったらしいが、まさにその通りだと感じるよ。」

「太宰か。文豪なんてのは皆、不憫な奴らだ。」

「そうかい、と男は応えて続けた。」

「問題はハードウェアを積めないことだが、ソフトウェアを改良できればその問題も解決できる。そこで爺さんにはソフトウェアの設計にちと力を貸してもらいたい」

「そうかそうか、個人的にはハードをこねくり回すのが性に合うんだが、たまにはソフトウェアと睨めっこするのも悪くない。」

「ありがたい。しかし、実際にどういう戦略でいくかによっても変わってくる。レースでは、おそらく小回りよりも高速を維持できる機体が多く出てくるだろう。そうするとハッ

ク合戦になることは確かだ。防御はもちろん、いかに他の機体を撃ち落とすかが鍵に

――」

「攻撃性のハックは無しじゃ。」

男は言葉を遮られたまま、ポカンと口を開けて一時停止した。男は応答せず、しばらくしてから再起動した。

「無しってことは、やられたら、やられっぱなしってことかい。」

「そんなことはない。レースなんだ。早く飛べる方が勝つ。守りだけ固めて、正々堂々やればいい。」

「なつ、今回のレースは、周回した回数が、、、、」

そこまで口にして男は慌てて口をつぐんだ。

「周回した回数がなんだって？。もしかして、制限時間内により多くサーキットを回った方が勝ちってやつか。さては『天空のル・マン』と呼ばれたあのレースかい。」

男は悔しそうに悶えている。

「そうだ、あのレースだ。酒が回ったのか口が滑っちまった。一本取られましたな、一休さんよ。」

おかしくて思わず笑ってしまった。実に愉快な男だ。

「なあに、設計図を見ればわかる。かなり気合が入ってる。一流のレースにでるチームであることは一目瞭然よ。だが、積極的にハックをかけるシステムを設けないのは本当じゃ。そこにリソースを割かずに、鉄壁の防護システムにする方が作業もメモリも軽くて済む。あのレースともあれば、腕になるつてもんよお。」

そう告げてから間が訪れた。男は真剣な面持ちで、考えに耽っていた。私も実際に、どんな設計になるかワクワクしながら、あーでもないこーでもないと思案に耽った。鈴虫の音がきれいだなあと、余計なことを考え始めてから男が口を開いた。

「では、報酬についてなんだが、城の会計システムを通して、その時のレートでスコアを受け取ってもらってもいいか。最低でも50万のスコアにはなるだろう。」

「随分と少ないのお、大昔に開発されたステルス機^{Stealth}の開発費は2兆円じゃぞ。50万のスコアだったら円換算で、500万円程度ではないか。」

「うぐ、そんな大昔のアメリカ国防の要を引き合いに出されても困るぜい。それに今回はソフトウエア開発だ。頼むよお爺さん。」

これ以上いじめても可哀想だと思い、いい提案を思いついた。

「そうじゃな、白甘鯛じゃ。完成したデータと白甘鯛を交換にしよう。」

男はポカンとしていた。そんな物でいいのかと、表情が物語っていた。

「随分食い意地のはったことだな。本当にいいのか、もうすでに交渉記録は残っちまつてるぜ。」

「だが、地球の養殖品や、火星の養殖品、バイオプリンターの生成物は受け取らんぞ。その辺の海にいる天然物でよろしゅう。」

「もちろんだよ。とびつきの釣りを釣り上げてみせるさ。だがいいのか、男に二言はないぜえ。にしても物好きナジジイだ。」

いちいち癪に障るやつだ。まあ自分も大概か。だが、スコアなんてものは、そんなに多く持っていない。仕方がない。通貨と違って誰かに自由に分け与えることもできない。私たちが済ませた仕事の分だけ、『城』から直接配布される、行動と選択の自由の可能性にすぎない。そのスコアを使って、燃料を消費し、必要な物資を借り受け、遠距離の移動コストを支払う。それにいくらスコアを持つていようと、希少なものはそう簡単に手に入らない。物資を手元に用意するには、必要なだけの正当な理由が必要だ。満腹なのにピザを注文してコココーラで流し込むことはできない。

「実は、私も食ったところはないのだ。俄然興味があつてな、簡単に手に入ればそれまでだし、もしかしたらレースまでに釣りあがらんかもしれない。その時はソフトを機体に乗せてやることはできない。」

「そうだな、最近はスコア稼ぎにバルーンクラフトに乗っていたが、しばらくは海で糸を垂らす羽目になりそうだ。全く、海はこりたつてのに――。だがよかった、これで契約成立だな。ほんじゃ握手つと。」

焚き火にメラメラと照らされた地黒の男の手が伸びてきた。握り潰される心配をしたが、怪我はいつでも治せると思い、覇氣に負けじと全力で握手をした。

「イテテテ、何すんだい爺さん。食うもん食って元気余つてんのかい。」

「なんも握手なんてこのくらいじゃろ。」

「あー恐ろしい。食えないジジイだ。」

これでひと段落ついた。面白いこともあるものだ。夕刻までの疲れもあったが、こうして食事と言いつつ仕事の話を持ち込まれると、妙に緊張してしまう。やつと一日が終わった気がした。

「いやあ、よかった。レースも楽しみだし、一休の爺さんは巷でも有名だからな。実に光栄ですよ。」

「一休よばわりはよけいじゃ。」

まあまあと酒を勧めてくるので、透明の液体が入った器に吸い寄せられるように腕が動いていく。これが酒の引力か、いやこの男の引力か。どちらにしても厄介なものだ。

「ビーチで助けてもらった時には本当に世話になったからな。海辺で爺さんが尺八をピーヒョロピーヒョロしていなかったら、今ここにはいない。あれから火星に行つて色々あったが、こうしてまた会えることが嬉しいよ。」

あの時は確かに、一節切尺八という、尺八の研究をしておつた。一節切尺八は、室町時代に中国から伝わつたとされる日本の伝統楽器だ。日本昔ばなしの一人さんのモデルとなつた一休宗純も使つていたとされる。海辺は波音が立つから、誰にも文句を言われずに練習できてよかつたのだ。その時に、この男と出会つたのを覚えている。

「なんとも気持ちのいいことを言ってくれるのお。火星でのお勤めも大変だつただろう。お主も飲め。」

酒を注いでいるうちに、男の手から力が少し抜けたように感じた。ちょうど空になった酒瓶を地面に下ろしてコンと音をたてた。一呼吸おいて男が話し始めた。

「あそこにいくのは2度目だつた。皆は一度行くだろう。兵役がなくなつたこの世界でも面倒な2年間つてのは皆平等に与えられるからな。火星で行われている食糧生産が、地球で過ごす人々の生活を支えている。それは、生まれてくる全てのヒトが知らなければならぬ、当たり前のことだ。だが、今回は火星の違う側面を見せられることになつた。」

男は空を見上げて、反省を嘯み締めたような悲しい表情を浮かべた。

「みんなの知っている火星の姿は、地表を埋め尽くす巨大なドームの食糧生産システムがほとんどだ。地上で規則違反に抵触した俺は、火星の地下開発公団に配属された。そこで採掘の監督責任者として従事した。確かに、俺は規則違反に抵触したが、そこまで重大なものではないはずなのに。あそこで見せられた景色は、その処罰にしてはずいぶんと重かった。」

「確か、クラゲの兄ちゃん、あの時はミズクラゲの探査中に活動可能範囲外にいるところを当局に見見されて、逃走したんだったな。」

「そうだ、少し深く潜りすぎたんだ。言っても大した深さじゃない。まあ、違反には変わりのないが。」

「火星でいったい何を見たんだ。」

言うのを少し迷ったかのような素振りを見せたが、目をまっすぐこちらに向けた。

「火星で生まれた子供達が、過酷な環境で働かされていた。俺は、彼らを監督を任されたんだ。彼らは、親が重罪人の場合がほとんどで、地球で罪を犯した後に、火星に強制送還された人たちがつくった子供たちなんだ。彼らのスコアはマイナスだった。親に会うこともほとんどできずに、人工知能の教育システムに育てられている。その傍ら、親のつくったマイナスのスコアを少しずつプラスに戻していつてるが、中には生涯、火星から出られ

るだけのスコアを稼げないまま亡くなる方もいる。」

基本的に、地球と火星間の自由渡航は、極めて高いスコアを支払わなければならない。火星で生まれた子供が、地球に行くことは自由渡航として扱われるのか。

スコアは、研究、生産実績の証として配布され、生きるために必要な物資と交換されるが、その人間の道徳性の指標にもなっている。高いスコアはより勤勉で、低いスコアは相対的に怠惰であると言うことを示している。しかし、スコアは通貨としての機能を持たないにも関わらず、血の繋がった個体同士では受け継がれることになっている。そして、重罪を犯したヒトは、火星市民として火星のドームで暮らすこととなり、スコアの獲得ができなくなる。火星市民としての活動の中で、子供を成すことがあれば、マイナスに転落したスコアが、子供にそのまま受け継がれることとなる。

「火星と地球間の航行は、いくつものコロニーや宇宙ステーションを経由して、検査、滅菌されなければならない。地球から行くときは、機械自然由来のシステムや粒子を洗浄し、火星から行く時は、遺伝子操作された食物の種子や生物が地球に持ち込まれないように十分なフィルターを掛けて滅菌しないといけない。これには地球と火星の、お互いのシステムをまもるために必要なことだ。だがそれは、罪を被った子供たちが、長い時間あの場所で暮らすことを正当化する理由にはならないはずなんだ。」

彼は取り乱しかけていた。話には聞いたことがある。火星で生まれた子供達が、不遇な立場にあると。しかし、この世界では、そもその罪というものを犯す動機がない。この地球は、機械自然によつてもたらされたユートピアなのだ。いくつかの条件はあるが、ヒトは何不自由なく暮らし、生きがいを持つて生きている。

「その親達はどんな罪を犯したんだ。」

「ほとんどの場合が生命犯だ。人を殺したり、それを幫助したりで、その動機として最も多いのが、色恋沙汰だ。この世界で手に入らないものはほとんどない。時間をかければ大抵のものは手に入る。しかし、人的資源はすべてのものが固有で、唯一のものだ。好きになつた相手が被つた時に殺し合う。人を殺してでも手に入れたという衝動は、分かりかねるがな。」

随分な話になつてきた。喉に酒を通す。

「うむ、私たちヒトは家を持たない。家族という関係性も流動的なものだ。だが、かつての市民社会のような支配、被支配の頃の意識が残っているのか。あるいは人を所有したという感覚が、人間らしさの最後の砦なのかもしれない。しかし、罪を犯してまで手に入れたと思つた相手だとしても、捕まつてしまえば、別れてしまうだろうに。」

「中には、パートナー揃つて罪を犯すこともあるようだ。もちろん火星に強制送還される

が、その後どうなるかは知らない。火星市民の生活をみたことはない。」

随分なこった。思わずため息が出ていく。

「それにしても、とんでもないことをやらかした責任を子供が取らされるとは、ひどいこともあるもんじゃの。」

「子供達は、俺の指示に逆らったことはない。だが、時々ひどく軽蔑した目で見られるんだ。俺は自分のことも火星にきた経緯も話さなかったが、子供達はなんとなくわかっていただろう。2年間は短くない、こんな思いをするんだつたら誰も罪を犯そうとは思わないだろうな。まあいいさ、俺にはどうしようもないし、どうこうすることもできやしないんだ。」

夜も更けてきた。鈴虫の声もどこかに消えていったようだ。

「やあ、湿っぽくなるからいけねえや、酒はまだある。どうせ今日はここいらで休むから、もう少し飲むことにすらあ。」

男は立ち上がり、調理場にある酒をとりについた。そこからは静かに酒を飲んだ。長いこと風に撫でられていた焚き火は、もうすっかり熾火になつてゐる。木炭の火の光がライフゲームのピクセルのように這い回っていた。

紅葉ノ間

プロペラは停止した。

ブルーノクラフトは形態移行を終えて、ふわりと宙に浮かび始めた。風は弱いが、機体が揺れて足元がおぼつかない。

「お客さんよお、揺れでよっちゃまいそうだ。とつとと降りてくれねえか。」

「なんだよ、パイロットのくせに情けないな。グライダーの準備に時間かかるんだ。焦って飛び降りて、怪我でもしたらあんたの責任にするからな。」

そう強気で声を張り上げるが、実際のところ私も吐き気をもよおしている。クラフトから降りる時は、毎度のことしんどいものがある。

「全く血の気の多い人だ。BCだってプロペラの完全停止は推奨されていないんだ。こうして安定しないし降りづらいだろう。プロペラ回した方がいいんじゃないか？」

なんだかごちゃごちゃと喋り掛けてくるが、無視してロープの張りと機材の不足がないか最終確認をしていく。

1、2、3、4、5、6、7—— ラッキーセブン。全て揃っている。

「おい。回そうか。」

「うるさいな、いつもこの調子で飛んでるんだ。心配無用だよ。」

むしろ飛び降りる前の不安定さが好きなんだ。ここは上空5000mで、富士山より高い。もちろん『海城プラント』の高さよりは、はるかに低い高度だが空気は薄い、心身を整えるのを焦ってはならない。機材は抱えて準備は整った。

目を閉じて、耳を澄ませて、静かに唱える。

風の唄をきけ。鳥は空を恐れない。

そのまま力を抜いて背中から空に落ちていった。

しばらく目を閉じたまま風をきる轟音に包まれていた。防寒スーツを着用しているが、音のせいかな、体が冷える気がしてくる。

隙を開けると遠くに小さな白い球体が見える。ブルーシクラフトがまだ膨らんだままだ。随分と高度が下がってきた、そろそろグライダーを開かないといけない。でもフリーフォールはたまらなく気持ちがいい。少しでも長く続けたいと、いつも思う。

体勢を変えて、地面の方を向いた。もう地上もだいぶん近くなって、下層の雲と同じくらいの高さになっていた。高さ2,000mくらい。そろそろグライダーを開かないと、そう思っているうちに、ヘルメットの骨伝導イヤホンから声が聞こえてきた。

『マスター、マスター！ どうしたんですか。早くグライダーを展開してください！ またこの前みたいに上昇気流を捕まえる前に降りちゃいますよ。』

「なー、いいじゃんもう少し。せつかく高いところまで運んでもらったんだから。」

『なーじゃないです。もう地面でペシャンコになつても知らないよ。』
しかたない、あまり彼を心配させても悪い。パラグライダーを展開させた。

「ふう、飛んでるね。」

『よかったです。ずいぶん長いこと落ちて行くから心配しました。僕を機械だと思って甘くみられちゃ困りますよ。気が気じゃないです全く。』

「あはははは、可愛いな。いいインターフェースだ。ちと小うるさいけど。」

『あんまり文句を言うとな勝手に再設定しちゃいますからね。ダンディなイケボのパーソナルナビゲーターでもいいんですか？』

「わかったわかった、ごめんね。新米人工知能くん。」

『人工知能って言われるのは好きじゃありません。あまりに月並みです。僕は、パーソナルナビゲーターです。性質や仕組みじゃなくて役割があるんです。』

「あらあら、そんなに気張らなくてもいいんだよ。わかってるって。」

『これだからヒト科生物は、』

「あー、言ったなー。人間への反逆行動として報告しちゃうから。」

『待つて待つて、多分エラーです。本心じゃないですよ。』

なんだかおかしくなって、空の上にいることを忘れて笑い転げてしまった。ずっと空に一人で浮かんでいても寂しいし、PZがいると楽しい時間が過ごせる。

『さあ、現在のマスターのディレクトリは、\日の入り\の撮影記録です。思う存分、空を舞ってカメラのシャッターを切りまくってください。』

「もーちろん！」

声を張り上げて気を高めた。グライダー備え付けのプロペラのスイッチを入れて、少しずつ高度を上げていく。

高度をあげている最中も、一眼レフのシャッターを切り続ける。肉眼と、レンズの視界を行ったり来たりして、周りに広がる世界の遠近を楽しんでいた。プロペラを回している間は、少し回転音が気になる。モーターの先は、トロイダルプロペラを採用していて、飛行時の騒音はズいぶんと低減されているから、回転音はそこまでの苦痛ではない。もし、ずっと静かに飛べるとしたら絶対に退屈だし、それではロマンがなくていけない。やっぱり早く動いたり空を飛んだりするなら、バタバタとうるさいくらいの音を奏でたい。

しかし、困るのは、カメラの音がかき消されてしまうことだ。シャッターのボタンを押しても、音がしないのには違和感がある。それでも写真を撮るのに夢中になっていたら、そんな些細なことは忘れてしまって、必死にカメラをのぞいている自分に気がついたりする。

しばらく空の上で上昇と下降を繰り返して、1時間くらい浮いていた。少し疲れてきたし、夕刻が近づいてきたので、カメラを置いて、一休みすることにした。

「PN、少しづつ。」

『マスター、どうしました。』

「色々いい写真が撮れたんだ、見てみて。」

そう言つて一眼のデイスプレイをヘルメットのフロントガラスの前に掲げる。空を飛ぶ時には、PNとヘルメットに取り付けられているカメラで視界を共有している。ヘルメットにはそのほかにも様々な、センサーが内蔵されていて、ヘルメットがPNの体そのものの代わりをはたしている。

『わー、いい写真ですね。空の上で、ほとんどが白と青の世界なのに、これほどいろいろな表情を見せてくれるから退屈しませんね。』

「それでもずっとやっていると、マンネリ化してきちゃうよ。まだウォーミングアップのつもりなのに、少し疲れちゃった。」

『それはそれは。お疲れ様です。少し、グライダーの制御をかわりましょうか。』

「うん、お願い。」

すると、ヘルメットの後ろからケーブルが伸びていき。グライダーの制御機構にPNが接続された。

「もう代わってくれた？」

『はい、バッチリです。この高度だと少し風が強いので、適宜移動しますね。』

「ありがとう、でも15分だけ目を瞑ってすぐに戻る。一休みするだけだから。」
『かしこまりました。では御ゆるりと。』

思ったより神経をすり減らしていたのか、目を閉じると自然と意識がまどろんだ。空の上で目を閉じる。フリーフォールの時とはまた違った感覚。安らかな眠り。人工知能とのコミュニケーションがあつても、私は空の上でただ一人。他の生き物もない。孤独な天空のゆりかご――。

少し夢を見た。昔の人の夢だ。着陸態勢に入つた旅客機の窓から地上を眺めている。畑が広がる中、所々に家が立っていて、空港に近づくにつれて大きな建物がたくさん通り過ぎていった。懐かしさがあつて、今はもう見られない景色。揺らぐ意識の中で、呼び声がかかった。

『マスター、そろそろ起きる時間ですよ。』

ハッとして目が開いた。やばい、寝過ぎたか。

「どれくらい寝ていた。」

『15分と59秒です。なかなかぐっすりしていたので起こすか悩みましたよ。バッテリーも十分にありますし。もう少しオートパイロットでも問題はありませんよ。』

背筋を伸ばし、空すべての空気を吸い込むようなあくびをした。実際には、 ∞ の空気が吸いこめていればいい方だろう。

『どうでした、いい夢だったですか。』

「あ、なんで夢見たこと知ってるんだ。まさか勝手に夢のぞいたな。」

『濡れ衣です。見てないですよ。浅い眠りだったらどんな人でも夢くらい見るでしょうし。』

「へー、ならいいけど。確かこのヘルメット、脳波のスキャニングもできたはず。あとでちゃんと機能調べておこう。」

『で、どんな夢を見ていたんですか。』

「もう忘れたよ、データは残っていないの。」

『ありますけど、見ていいんですか。』

「はあ、もうどうせ全部筒抜けなんだ。気にはしていないよ。」

『解析してみますが、明瞭なイメージを抽出するにはこの機器だと不十分で、——航空写真のような映像が浮かび上がってきたくらいです。まさか、寝てても空の夢にいたんですか。』

「おー、そうだったかも。」

『さすがは空人（そらんちゅ）ですね。』

「なにそれ、変な『Dネーム』つけないでよ。」

『そういえば、私にも何か呼びやすい名前をつけてください。DZだとあまりに月並みです。』

「じゃあソランチュ。」

『え。』

「ソランチュ。」

『ほんとに？』

「ソランチュ！」

『あー。ありがとうございます。ちゃんとソランチュって呼んでくださいね。』

こうして、私のパートナーはソランチュに進化した。勝手に夢をのぞいてくるかもしれない嫌なやつだ。そしてかなり気に入っている。

昼寝の甲斐もあって、目も頭もスッキリした。体も少し軽く感じて、おそらく寝ている間に、上空の気圧に慣れたのだろう。これで、いい写真が撮れるかもしれない。そんな予感があった。もうすぐ日が沈む、夕暮れの空は、一瞬で劇的に表情を変えていく。風が、

雲の形をコネながら、沈みゆく太陽によつて空が七色に彩られる。自分も飛びがなら、撮影しているから、同じような写真は二度と撮れない。それを一年中続けても、雲の濃さや形、太陽の角度も移ろう。一度撮った写真は、一年後にまた同じ場所で、同じ景色に出会えないかと期待させるけれど、あいにく空は二度と同じ表情を見せてくれない。全ての瞬間に空に出会つて、一方的に全ての空に別れを告げられる。私はこの研究対象に飽きることはないだろう。

今のディレクトリは、東京湾沿岸のサンセットだけれど、いずれは世界中の空を写真に収めたいと思う。でも、きつとどこの空にも私と同じような人がいる。同業者で混み合つてはいけないから、いい場所があればいいんだけど。

シャッターを脊髄反射で切りながら、空をみて、空を切り取つて、また別の空のことを考えている。まるで、空を中心に私自身が、無限に分離、分散しているような気がする。

夕暮れがやつてきた。

空が少しずつ紅く染まり始めた。雲もまばらに広がっている。ここからは、私の中で戦いが始まる。空にはなにもないけれど、雲を引き寄せ、そこにある空気を全て握りしめて

やろうとも思うほどの、エネルギーが湧いてくる。空がそうさせるのだ。私は悪くない。グライダーを操縦しながら、隙を見つけて一眼のレンズにベストな一瞬を捉じ込める。しかし、夕刻は私の美的感性を嘲笑うかのように、美しい景色を更新し続けていく。陽が落ちて、夜が近づいてくるほど、空は深く広がっていく。完全に夜に包まれるまでこの戦いは終わらない。

視界が文字通り七色に輝き始めた時に、不自然な黒い物体が遠くの方にのぼってきた。「ソランチュ、なんかあそこに見える？黒っぽいものが浮かんでる気がするんだけど。」『前方に“Directory Dies”通称DDが上昇しています。』

それを聞いた途端、体が自然と動いて、パラグライダーは全速力で飛び始めた。『急にどうしたんですか。急激な速度変化は危険ですよ。それにあまりDDに近づかないよ方がいいです。なにが入っているかわかりませんし、万が一、DDを損傷させた場合、大幅なスコアのペナルティが課せられます。』

思ったよりもDDの上昇が早い、いいポイントまで無事辿り着けるかどうか。

『マスター、聞いてますか！。あんまり近づいたらダメですよ。』

「わかってるって。」

そうは言ったが、論理ではまるでわかっていなかった。普段とは違うことが起こってい

る絶好の機会。これを逃したら、いつ同じ景色に出会えるかわからない。まあ、いつも同じ景色には出会えないんだけど、それでも撮るべき写真のために全身が震えて鳥肌が立っていた。

もう少し、高さが欲しいと思った矢先、上昇気流に捕まった。パラグライダーはグイグイと上り、DDを見下ろすことができた。グライダーのプロペラを止めて、カメラを構えた。

次の瞬間、太陽と地平線とDDとカメラと、私の目が一直線で繋がった。シャッターの音は聞こえなかった。槍に貫かれたのか、槍で貫いたのか、あるいはその両方か。貫かれた太陽は息絶えて、私の心も戦意を喪失した。今日の戦いが終わった。

そこからは、昼間の眠りとも違う、まどろみに襲われた。突然訪れた奇跡に体の全てのエネルギーを吸い取られて、強制シャットダウン待ったなしといったところだ。でも疲労の真ん中が、達成感で満たされていて最高の気分だった。空の上で一人孤独に、最高の気分だ。しかし、乱れた気流がグライダーを離してくれなかった。

『ちよつと、マスターやばいですよ。オートパイロットに切り替えます！。』

「あ、あとは頼んだ。」

『頼んだじゃないですよ。DDがもうすぐ目の前じゃないですか、このままだと警告が――。』

急に懐かしい感覚に襲われた、これは数時間前に経験した、フリーフォールつてやつだ。

『緊急パラシュートを展開。3分後に海上、沿岸から3kmの地点に着水します。』

私たちは、DDに急激に近づいたことにより、警告なしでDDの防衛システムに撃墜された。

『もうなにやつてるんですか、これは当局に怒られますよ。だから近づくなんて言ったのに。』

「まあ、いいじゃん、写真も撮れたし、そういうこともあるよ。でも最後に操縦代わってくれて助かった。これで私の責任が半減する。」

『確かに、ナビゲートしている僕の責任でもあります、ちゃんと警告はしましたよ。あんまり無茶はしないでください。こんな夕刻にわざわざDDが回収に動いていたんです。もししたら、貴重な物資を輸送していたのかもしれないじゃないですか。何かあっては、人類の損失です。』

「写真が撮れなくても人類の損失さ。それにあの瞬間が撮れなかったら私がクライシス

よ。」

『まあ、今はいいです。このあとは、着水までは問題ないです。しかし、現状の動力で岸まで戻ろうとすると2時間はかかるでしょう。ベースキャンプに到着するのは3時間後との試算が出てます。』

「弱ったなあ。仕方ない、弟に迎えにきてもらおう。コールしてくれ。」

『了解です。』

数秒後に、イヤホンの音声にヒトの声が流れてきた。

「どうした、もう日も暮れたしそろそろ帰ってきなよ。」

弟の声だ。少し申し訳ないが、頼むしかない。

「いや、あの、困ったことにね。もうすぐ東京湾に墜落するんだ。」

「え！ 墜落？ なんで。」

「まあまあ、詳細はあとでゆっくり話すよ。その、頼みがあるんだけど、迎えにきてくれない？」

「えー、夜の海危ないから嫌なんだよ。」

「そこをなんとか。一生のお願い。」

それからしばらく、お互いにいがみ合いながら、なんとか迎えにきてもらえることに

なつた。そして無事に海上に降りて、緊急用ボートの上で今日撮つた写真を見返しながら時間が経つのをまつた。弟は呼んでから、30分も経たないうちに来てくれた。

「あー、来てくれてありがとう。神様仏様にがし様々。」

弟は急な呼び出しにも関わらず、あまり不機嫌そうではなかった。

「今日は一日中イルカたちといて、コールもらつた時には別れたばかりだつたんだよ。あんまり彼らの機嫌を損ねたくなかつたから心配したけど、沖まで出てくれるつて快諾してくれたんだ。」

弟のダイレクトリは、イルカに関する項目で、Dネームは『ドルフィン・テイマー』。

弟は、日本近海のイルカたちの音声を録音して、彼らの言葉を研究している。ここまで、弟の乗つたボートを、仲間のイルカが引つ張つてきたようだ。動物の言葉の研究はずっと昔からの情報が積み重なつて、さまざま生き物とコミュニケーションが取れる段階まできている。それでも私には、イルカの言葉はチンプンカンプンだけど、弟は研究対象にするうちに自由に彼らと意思疎通ができる方法を確立していった。さすが自慢の弟。

「ちよつと冷えてきちゃつたんだ。イルカたちに陸に帰してと伝えてくれ。」

「オーケー。すぐに帰ろう。バナナボートみたいに揺れるから気をつけてね。すぐ出発だ

よ。
」

こうしてなんとか帰路につくことができた。浜辺についてからは、破損したパラグライダーの運搬を弟が手伝ってくれた。それでもベースキャンプに戻って腰を下ろした時にはヘトヘトで、立ち上がることはできなかった。

気がつくとも朝になっていた。木の幹にぶら下げられた『りゅうけん流繭』の中で目を覚ました。繭から出て、周りを見渡すと、弟がお茶を淹れているところだった。

「おはおう。ティマー。」

「おはよう。エアリアル。今、生姜茶を淹れてるんだ。あつたまるよお。」

体が少し重たいが、軽くストレッチをして、その辺の土に腰を下ろした。

「昨日はありがとう、空と海で体温奪われちゃって、全然元気なかったんだ。」

両手に竹の器を持って、弟が隣に座った。

「ベースについてからボタンキューなんだもん。繭の中に投げ込むのが大変だったんだよ。はいお茶。」

じんわりと温まった竹の器を受け取った。たちのぼる湯気から香りを掬って、器を口元

に運んだ。

「投げ込むなんて酷いことするな。でもありがとう。お茶おいしい。」
熱々のお茶を啜りながら昨日のことを話した。

「よかったね、いい写真が撮れたんだ。見せてよ。」

「この写真を撮るのと引き換えにDDに撃墜されちゃった。」

若干の申し訳なさとしずかしさを笑って誤魔化そうとしたけど、弟はまるで気にしていないようだった。

「エアリアル、この写真すごいよ。DDが夕日に重なって日食みたいだ。大福日食のダイヤモンドリングだよ。縁起が良さげだね。」

子供らしい笑顔を浮かべて、こっちまで嬉しくなる。

「むしろ不吉な気もするけどね。」

すると『虫の知らせ』が届いた。近くの『電鏡』までお呼び出した。

「ほうら言わんこっちゃない、どうせ昨日のDDとの接触未遂についてお達しが来たんだろう。」

ゆっくりと時間をかけて生姜茶を飲み切ってから、虫の知らせをたどった。

虫の知らせは、各所に点在する電鏡から放たれる小型ドローンだ。その名の通り、虫のようなサイズ感で、どこにでも大量にいる。モデルになつてゐる虫はさまざまだが、二つの機能を持つてゐる。ひとつは、電鏡に届いた情報を周辺のヒトやロボットへと伝える通知機能。もうひとつは、アリのように列を成した虫たちが連結して、遠距離の有線送電や質量の少ない物資を運んだりするケーブル機能がある。機械類のバッテリーを補充したいときは、電鏡から対象の機械を虫たちが作り上げたケーブルで接続して充電する。ヒトが怪我をして動けなくなつた時も同じように、虫が連結して、治療用の薬剤を患者まで運搬することができる。

現在の世界では極めて重要なインフラの一つとなつてゐるが、虫の知らせは、機械自然の大量発生の中で生まれた技術を転用して、ヒトが作り上げたものだ。また、通常の機械自然は有機物を含み、自然環境の食物連鎖の一部となつてゐるように、虫の知らせも同じ性質を持つてゐる。機械自然と明確に違ふ点は、人間が生産し、制御、管理してゐるところにある。

たどつてゐる虫の知らせは、バッタ型で、草むらの中を跳ねてゐるからすぐに見失ひそうになる。一番わかりやすいのはトンボ型だけれど、秋も深まつてトンボは景色の中から

消えてしまっている。

ベースキャンから五分ほど歩いたところで、小型の電鏡が現れた。獣道沿いの木の影に隠れていて、虫の知らせに誘導されなければ存在にも気が付かないだろう。

フィールドに点在している電鏡は、鉢植えから伸びる向日葵のような形をしていて、鉢植えにあたる場所に、物資や駆動システムを内蔵したタンクがある。そこから茎のように伸びた細い柱の先に、ディスプレイがついている。電鏡はかつて人間が使っていた携帯端末、スマートフォンから派生したガジェットだ。

スマートフォンは構造上重大な欠点を抱えており、人間が進化する上で自由にした前足、手を拘束するものとなってしまった。ハードウェアとしての欠点を改善するため、スマートフォンは腕時計型の端末や、巨大なゴーグル型の視覚拡張装置にその機能を引き継いでいった。最終的に辿り着いたのが、電鏡というわけである。城や火星、宇宙に点在する人の居住空間には、標識のように動かないものがほとんどだが、フィールドでは天候や、地形変化に合わせて移動できるよう、蜘蛛のような脚がついている。基本的にどんな過酷な環境も移動できるから、崖を登っているところや川を渡っているところを稀に見つける。狭い洞窟の中を進んでいる時に出くわすと、ディスプレイをタンクに格納している

から、巨大なダンゴムシに見えて驚かされることがある。しかし、地上では縦横無尽に移動できるのだが、空は飛べないのと。海のような深い水深の中を進むことはできない。電鏡の通信手段は無線の電波通信のため、水の中にいて無線通信をすることはできない。基本的にどこにでもある電鏡だが、高機能な通信端末を持たない生活をしていると、虫の知らせを待つて、電鏡まで移動しなければならないのは少しの不便を感じる。特筆して急ぎの用事に振り回されることもないからガジェットとしては理にかなっているのかもしれない。

「はあ、やつとついた。寝起きなのに参っちゃうな。」

電鏡が見えてから、虫の知らせはもうどこかに姿を隠してしまった。草をかき分けてディスプレイの前に立ち、通知を確認した。やはり、昨日のDD衝突に関する通達らしい。

「げっ、めっちゃスコア削られるじゃん。せつかくだし、昨日の写真アップロードするか。結構いい写真だから、これでマイナス分のスコア補填できないかな。」

『多分、無理だと思います。事故に関連する写真で、かつ犯行の証拠にもなるわけですか

ら、わざわざアップロードしたら余計にスコア減るんじゃないですか。』

「犯行の証拠って、そんな言い方するなよお、もう。PZオフにするの忘れてた。」

『PZじゃありません、ソランチュです。』

「なんだ、その呼び名気に入ってるんだ。ちよつと待ってて、すぐ手続き終わらせるから。」

通達の確認と、『犯行の証拠』以外に、いくつかのデータをアップロードして、スコアを補填してからベースキャンプに帰った。

「テイマー、聞いてよ。スコアめっちゃ削られたよ。昨日のベストショットにスコアはつかないさうだし、朝からしんどい。」

何かしらの作業に取り掛かっていた弟は、こちらに視線を向けてきよんとしたが、特に関心を示してはくれなかった。実際そこまで落ち込んでいるわけではないし、私もただ口に出したかっただけだ。

「おかえり、エアリアル。今日もまた、飛ぶんですよ。」

「うん、そのつもりだったんだけど、城にいつてスコアを稼ぐことにするよ。『器鏡』でレートの高そうな『メタネーション』に潜る。昨日の疲れもあるし、冬になる前に欲しい

カメラがあるんだ。がつつり稼がないと。」

「そっか、何日くらい潜る？」

「器械はあまり好きじゃないんだ。いつも嫌ですぐ帰ってきちゃうけど、目標のスコアを稼ぐのに五日くらいはかかるだろうか。」

「とりあえず五日くらいかな。一週間は越えないようにするよ。」

「おー、エアリアルにしては頑張るね。帰ってくる頃には、空飛びたくて廃人になってるだろうな。そうだ、長くないなら、城に行く前に洗濯手伝ってよ。海に潜ってばかりで衣類も汚れてきちゃったから。」

ちようど私も洗濯がしたかったところだ。すぐに、二人で洗濯の準備に取り掛かった。

近くの小川に衣類と大きめの桶を持ってきた。荷物は私が持つて、弟はせつせと枝を拾いながら後ろを歩いている。川の流れる音が聞こえてきてから、弟が寄ってきた。

「煮洗いをしたいんだ、まだ薪が足りないからここで少し集めてから行くよ。衣類の汚れ軽く落とし終わったら、火の準備しておいて。」

わかった、と告げてから私に背を向けて、飛び跳ねるように枝を拾い集め始めた。清流が視界に現れて、川縁に降りるのに良さそうな木々の隙間を探す。足元も悪いし、目の前

に草木が繁茂しているからだ。

「いい感じにすり抜けられる場所が見当たらないな。」

『マスター、下流に5,000mほど行つたところに、開けた川岸があります。そこまで少し歩いてみませんか。』

首元から音が向かってきた。ネックレス型のナビゲートデバイスからソランチュが話しかけてくる。昨日はヘルメットの骨伝導イヤホンから音声出力していたから強い存在感があつたけれど、落ち葉の上を歩きながら風に揺れる林の中にと、まるで草木がどこからともなく話しかけてくるみたい。

「ん、ありがとう。上空の衛星データから確認したの？」

『いいえ、周辺の機械自然の移動ログをスキャンしました。機械自然が舗装した道路が私には見えるんです。』

「ずいぶんたくさんの目を持つているんだね。ビッグブラザーも顔負けだ。」

『そんなこともないですよ。ヒトは私にはない、心の目を持っています。ビッグブラザーも人間の心の内に潜んでいたのかもしれないですから。』

「あははは、そんな物騒なものは私の心にはないよ。それにここは1984年じゃない、少しはマシな世界さ。それに、私の心はソランチュにも映されるんだ。君に心がないなん

て悲しいこと言うなよ。」

下流に歩みを進めながら、どこからともなく見ているであろうソランチュと話す。

『そうですね。でも機械の心は有限の心です。人の心のように、無限に細かく割れていくことはありません。』

「ずいぶん詩的な機械だこと。後ろで厄介な芸術家が操っているな。」

『有限だけだとくさんのリソースがありますからね、過去の厄介な芸術家が私の心に宿っているのは間違いないです。』

そうこう話している内に、遠くの木々の隙間から広い空が見えた。おそらくあの下だろう。早歩きでテンポ良く進んでいる内に。川に降りらる道を見つけた。

川の水を汲んでから、服についている汚れを桶の中でこそげ落とす。色が変わってしまっていたり、シミがついているものもあるけれど、洗剤も漂白剤も『フィールド』での使用は禁止されているからどうしようもない。諦める。私も弟もさほど気にはしていないからモーマンタイ（問題ないの意）。

私たちの住むこの世界は、在来のも自然と機械自然が混合しているものだ。『自然』と言うにはナチュラルさに欠ける気がする。納得できる言葉じゃない。だから、フィールドと

いう方が自然だ。フィールドというと畑を思い浮かべるけれど、実際のところ言葉なんて便宜的に使えばそれでいいのだ。細かいことを気にするな。めちやくちやだ。でも自然というところには流れがある。風の流れも、生き物の流れも、土の流れも、川の流れも。機械自然も流れの中にある。堰き止められたり、閉じ込められたりすることはない。だから自然というものの性質は今も昔も変わらない。それにまだ本当の自然は残っている。海の中は機械自然が進出していない。まだこの地球のほとんどの広大な塩水の中には本当の自然の流れが残っている。波と海流は地球四十六億年の歴史の末端として渦巻いている。

水と布をバシャバシャゴシゴシとこねくり回しながら、自分たちの汚れをいずれ辿り着くであろう海に解き放っていく。しばらくして弟がたどり着いた。

「あー、この場所いい。バーベキューしたくなる——。火の準備はまだだね、やつておくれ。」

「うんごめん、そこまで手が回らなかった。もうすぐ汚れ落とすのも終わるからよろしく。」

外も涼しくて水は冷たいから早く火を囲んであたたまりたいと思う。息を吸い込んで早く終わらせようと意気込む。日本昔ばなしの川で洗濯をするお婆さんを思い浮かべる。あのお婆さんのように、のほほんと洗い物を済ませて、大きすぎる桃を持ち帰るタフさを全

身に宿らせた。

背中の中でパチパチと音がし始めた。火おこしが終わって大きな薪が爆ぜる音だ。洗物物は済んで、水と洗濯物の入った桶を慎重に火元まで運ぶ。河原の石に躓いて水をこぼしてしまつてはせつかくおこした火も、汚れを落とした衣類も台無しだ。タプタプと揺れる水を制したい焦りを抱えながらなんとか桶を火の上にくべた。

「よつこいしょつ。終わつたあー。」

「お疲れ様、エアリアル。あとは沸騰するのを待つだけだね。火も起こしたことだし、なんか食べられそうなもの探しにいかうか。朝ごはん食べてないからお腹すいちゃつた。」

「私は一旦休むよ。火を見るから行つておいで。」

弟はニンマリとしてから、また飛び跳ねるように川へ走つていった。

しばらく火を見ながらぼんやりしていると桶が沸騰して熱湯が飛び散り始めた。火が消えないように、桶を火元からずらして火力を調節する。これで、服にこびりついた匂いも雑菌も綺麗さっぱりなくなるだろう。惚けていると桶の上に、一匹のマダニが浮いているのを見つけた。さつきも電鏡まで獣道を通つたし、服についていないかそわそわしている、突然背後から気配がした。

「やつほー、イワナだよー。」

後ろから忍び寄ってきた弟が、ねっとりした粘膜に覆われたイワナを振りかざしてきた。

「ずいぶん早かったね、掴み取り？」

「そうだよ、そんな大きくないけど、三匹取れた。洗濯した後でこの辺には全然いなかったよ。少し上流に行ったら岩陰とかに結構いた。塩焼きにしよう。」

冷え切ったのか、弟が体をぶるつと震わせて、火元にしゃがみ込んだ。それから、串刺しにしたイワナに塩を振って焼いている間、ぬるくなつた洗濯物を絞って乾かした。

「朝から大忙しだね。塩焼きもできたよ。エアリアルに2本あげる。」

「え、いいの。3本だから戦いになると思っていたよ。」

「そうだね、もう一匹とって来れたらよかったんだけどね。でも今日から『器鏡』にいくんでしょ。しばらくまともなご飯も食べられないでしょうし、あげる。」

そう言つて口をカッピらいた白目の塩焼きを二本受け取った。外はパリパリで、焚き火の香りが少しついている。かぶりつくと中はホクホクで、エネルギーの枯渇した体に脂が染み渡ってきた。弟はバリバリと頭から齧り付いていった。

「んんんんん。おいひい。」

「おいしいね、野生味あふれぜ。」

「ヒトらしくないね。イルカの気分？」

「もちろん、日本在来のカワイルカさ。」

「日本列島の川にイルカっているの？」

「僕を除けばいないよ。大陸の方にはいるみたいだけど、まだ会ったことはない。」

あまり興味はないんだけど、ふーんと相槌を打っておいた。でも昨日みたいに、いつかまたイルカに助けてもらうかもしれないから、日本在来のイルカくんを大事にしようと思う。

食事も終わって、乾かしている洗濯物をおいたまま、ベースキャンプまで戻った。私たちは身支度を済ませて、『多態器鏡』のある『海城プラント』へ向かう。今日も弟とイルカが海原を運んでくれた。

柳ノ間

僕は好奇心旺盛で野山も海も駆け回る一歳。

現在のディレクトリは、『(真核生物動物界脊索動物門)脊椎動物亜門(哺乳綱)鯨偶蹄目(ハクジラ亜目)マイルカ科(バンドウイルカ属)バンドウイルカ(日本近海)ティマー(動物言語)音響研究』。大方、『ドルフィン・ティマー』のDネームで呼ばれている。今日は久しぶりに、陸でも海でもない。あんまり好きじゃない。『海城プラント』まできた。

海城プラントの印象はとにかくデカイ。他にある山とも比べ物にならない。僕の生まれるずっと前から、当たり前のように大洋の上にそびえている城を、昔の人が見たらどう思うだろうか。

海拔12kmの高さまで伸びる円錐型のメタボリズム建築。その直径は、36km以上にも達する。城の周りは、波力発電のブイが広がっていて、打ち寄せる波を電力に変える。この建造物は宇宙との出入り口でもあり、成層圏から回収したDDの多くは城に集められる。城の歴史は長く、元々は海底のエネルギー資源を掘り出すための海上プラントだった。そ

れから、時代が過ぎて、今では人類の居住区であり生産拠点、宇宙と地上を繋ぐ城郭都市になった。

あまりにも大きすぎるこの建築を実現するために、地上を棲家にしていた昔の人間たちは、その家を引き払って、資源や労働力を集結させた。

二十世紀後半に、起こったメタボリズム建築の思想は一時期はもてはやされたものの、環境破壊を危惧したエコキャンペーンやSDGsなどのプロパガンダでいつの間にか時代の中に消えていった。しかし、機械自然がもたらした環境変化に耐えかねてヒトは大海原に棲家を移した。海の中や上では機械自然の影響が少ないからである。その時にメタボリズム建築様式が歴史の中からサルベージされて城をつくり上げるまでに至った。現在では世界中に海城プラントが点在し、陸上にも数は少ないながら城が存在している。

イルカに連れられて洋上のブイの間を抜け、上陸地点まで辿り着いた。ボコボコと出っ張った岩肌のようにブロック状の居住区が積み重なって、黒川紀章の設計した中銀カプセルタワービルみたい。上を見上げると城の上層部は、白い雪の傘を背負っている。もう冬も近づいて、夏の時よりも積雪の層が広くなっている感じがする。雪の重さで城が潰れないかと心配になるくらいだ。城の上では一年中スキーやスノーボードで遊べるけれど、野

山のような景色の豊さが無いから、あんまり面白いとはおもわない。

イルカたち（とにかく可愛い）に別れを告げて揺れる栈橋を進んで行った。ここまでくるとまるで巨大な壁に立ち向かっていくようだ。山らしい全体の形は視界に収まりきらず、上空に雲も出てきて、その形が曖昧になる。雲が上層部を完全に隠すとその山の頂が本当に存在するのかと不安になる。ここ1ヶ月ほど、エアリアルが『多態器鏡』に潜るのに何度か陸と城の往復を送り迎えたけれど、今日は僕が器鏡に潜る日だ。

器鏡に潜ったのは、一年前までの教育課程で最後だから、なんやかんや楽しみではある。栈橋から城内に入り、動く歩道のトンネルの中を進む。取り囲む天井と壁に吊り下げられた電灯がひとつひとつ視界の横を過ぎ去り、床に敷き詰められたタイルを一枚ずつ一定のテンポで踏み抜いていく。タイルは自然界にはない規律で満ちた空間の象徴。かつて世界最大の都市であった関東平野に住む人たちは、毎朝、毎晩、家から職場までの道のりでタイルを見つめながら、自身を社会の歯車として還元していったのだろう。コツコツと響く足音と永遠に変わらないであろうタイルの並んだ視界が僕の感覚の全てを削ぎ落としていくようだ。

動く歩道を何度も乗り換えて、上下左右縦横無尽に運ばれた。そうして気がついた時には、視界が開けてギラギラとした巨大な都市空間が目の前に広がっていた。

外の太陽光が差し込む中、負けじとネオンやディスプレイの広告がひしめいている。さまざまなレストランや雑貨屋、服屋が広い空間の隙間を駆逐するかの如く敷き詰められている。さほど汚れている場所ではないのがあるがたいけれど、人間の業がこの場所にもねっとりこびりついている。目的地は多態器械のエリアだが、ここを通過しないことには辿り着かないから少々気が滅入る。いろんな商品が掲げられているのを見るうちに、存在しないはずの欲望が自分の中に立ち上ってくる。目がまわり、喉も渴いたから一度カフェに入ることにした。

近くに気になっていたお店があった。ガラス張りのお店で、いい雰囲気なのが外から見えるのだけれど、僕には少しハードルが高いと思っていたお店だ。少し息が乱れる緊張感に包まれながらガラスの扉を開けた。中は若い男女のお客さんで賑わっていて、一人の従業員とオールドスクールな配膳ネコドローンが店内を走り回っていた。

人の視線を気にしながらカウンターの席に座り、メニューを見た。コーヒー、カフェラテ、エスプレッソ、紅茶、ハーブティ、スムージー。なんでもある。周りで注文している声が聞こえるけれど、なんだかディレクトリ並みに長い呪文を唱えているお客さんもある。メニューのどこにそんなものを書いてあるのかと必死に探した。落ち着こうと入店したのに、これじゃあ余計に気疲れしてしまう。

そうこう悩んでいるうちに従業員の方がカウンター越しに注文をとりにきた。シヨートヘアの女性の方だった。

「ご注文はお決まりですか？」

まって、まだ返答するのにコンマ5秒ほど残っているはずだ。目から地球を滅さんとするようなビームを発射してメニューをスキャンした。目についたのはバナナだった。

「バ、バナナの。えっと、ソイミルクバナナシェイクのホットに生クリームとハニーソーストッピングで——。」

僕も呪文を唱えることに成功した。こういう時に落ち着いてコーヒーとか頼めればどんなにいいか。僕はまだコーヒーが飲めないんだ。緊張しているのを見透かされたのか、シヨートヘアのお姉さんはいたずらっぽいな顔になって返してくれた。

「かしこまりました。少々お待ちくださいね。」

まあまあ、ここまでは予定通り、想定内、ソイミルクバナナシェイク楽しみ。モーマンタイ。その気配が悟られないように深呼吸をして、またメニューに視線を泳がせ始めた。これが田舎者ってことなんだろうか。だって普段自他ともに認めるイルカとして過ごしているんだ。こんな空間の変化と選択に迫られて正気でいられるはずがない。イルカのみんなだとしたら何を注文するだろう。イワシもイカもメニューにはないけど、意外とバナナ

とか好きなのかな。でも肉食性だし、食物繊維を消化することは多分できないだろうな。ジュゴンはレタスとか食べれるのに違いはどこにあるんだろう。イルカのままじやここには入店できない。それじゃみんな可哀想だし、僕も不憫だからイルカも入店できるカフェを探さなくちゃ。

「はい、お待たせしました。ソイミルクバナナシェイクのホットに生クリームとハニーソーストッピングです。どうぞごゆっくり。」

突然ソイミルクなんか目が目の前に現れた。そこまで大きくはないけれど、白と黄色に輝いているシェイクは、城を眺めるくらいに迫力があつた。おおー、と思わず声が出た。すかさずその山を飲もうとしたが、目の前には持ち手の長いスプーンと竹素材のストローがあつた。どっちをどの順番で使つて飲めばいいんだ。もしかして飲み方を間違えたら、文化を軽視したとかでスコアを削られるのか。なんて場所にきてしまったんだ。

上にトッピングされた生クリームのホイップを混ぜてから飲むべきなのか、ストローでシェイクの下層から吸い上げるべきなのか。前者だとせつかくのビジュアルが台無しだ。後者だと下に溜まつた甘い部分を吸い尽くして最後生クリームだけ残ってしまう。

僕は決意した。スプーンを手に取り、コップの淵の生クリームとシェイクが両方含まれるところを掬つて口に運んだ。甘い。ホットのシェイクだから甘つたらい。クリームもす

ぐ溶けて不思議なまろやかさに包まれる。それから別に熱いわけでもないのに、律儀にスプーンで掬いながら飲み進めていった。何か間違っているのだろうか、ストローの一番はない。洗った物も少なくて済むだろうし、これはお店にとつてもいいことだろう。うん。甘くて美味しいから不安なことは忘れよう。西洋文化では音を立てずにスプーンをスプーンで飲むんだ。これは上品だから間違つてない。大丈夫。

もうあとシェイクが姿を消すまで半分くらいだ。結局、ストローをさして飲み干した。一気に口の中全体が甘さで満たされて、たまらず幸せな笑みが溢れた。ほつぺたが落ちるつてこういうことか。もうこれを知る前の自分には戻れない。

スコアで精算して、店を後にした。エネルギーを補給できて、あらゆる困難を潜り抜けた自分を少し大人に感じた。店のガラス扉を閉めた後の空気がおいしかった。城の屋内とはいえ海から流れてくる空気だ。澄み切っている。

それから、あらゆる店の誘惑に勝ったり負けたりしながら、多態器鏡のエントリー手続きを済ませた。指定された番号の器鏡の場所まで長い道のりを移動して、ようやく目の前に『多態器鏡』を捉えた。

器鏡という名前の通り、大きな器の表面を鏡のような反射板が包んでいる。エントリー

するときに青みがかった紫色に発光しながら器鏡全体が開くので、思わず花の桔梗を想起してしまうデザインだ。

器鏡は『メタネーション』にアクセスするためのフルダイブ型VRキャビネット。あくまで家具としての定義の中にある器鏡だが、元は人工知能によつて脳波から夢の解析を行う研究の過程で開発されていたものだ。器鏡の中に入ったヒトは、ナノマシンが含まれる溶液で全身が浸かり、極めて浅い眠りに誘われる。その浅い眠りの中で聴覚情報や視覚情報を器鏡から受け取つて白昼夢を見るように、仮想空間内に作られたかつての国家群、『メタネーション』にアクセスすることができる。機械自然よつて国土を追われた人間たちは、その伝統や人間としてのアイデンティティを失わないために、仮想空間のシュミレーションの中に国土と国家、世界の歴史の末端を創り上げた。

このメタネーションにアクセスするために、器鏡が使われるのは、極めて高い解像度で仮想世界を見ることができからだ。溶液の中にあるナノマシンが、仮想世界での動きに合わせて、肌や筋肉に直接刺激を与えることができる。もしメタネーションのアメリカ合衆国ハワイ州でビーチを楽しむもうとするなら、足の裏にはどこから運ばれてきた白い砂浜の感触と、肌を照らす太陽の温もりを器鏡のナノマシンを通して感じるることができる。そしてうつすらと眠ることにより、音や映像のリアリティを高めることができる。現

実とのリアリティに比べれば、確かに不足があるかもしれないが、従来のどんなマンガジェットよりも秀でたシステムであることには変わりない。それに案外、夢を見ているときは、それが夢であることに気がつかないことが多い。

仮想世界を構成する上で最も重要なことは、その世界が現実だと勘違いできることが最も重要だ。映画も一種の仮想世界を楽しむものだが、映画館の椅子に体を預けている間は自分の体と現実を忘れて映画の世界に没頭する。そのように器鏡の中にいる間は、自分の体と現実を忘れて、メタネーションこそが現実だと認識する。これは自分の無意識下がコントロールされることでもあるから、一見すると危険なことのように感じる。しかし、人間が鉄の塊を空に飛ばして大陸間を移動することになったように、多態器鏡の存在と機能に私たちは慣れていった。

むしろ、かつてハリウッドの兄弟？だか姉妹が描いた、世紀末のSF映画『マトリックス』の世界が到来したと喚起して私たちはメタネーションを存分に楽しんだ。しかし、マトリックスに出てきた仮想世界の監獄よりゾツとするような機能もある。

それは、器鏡からメタネーションにアクセスしていない時でも、僕たちの分身がメタネーション内で生活しているという点だ。この機能は器鏡の使用者の意向によって無効化することができるが、多くの人がメタネーションに分身を住まわせている。分身がメタ

ネーション内で経験したことは、次回の器鏡使用時にその記憶と使用者の自意識がミックスされる。だから、器鏡を使っていない間に、メタネーション内の自分が勝手にシュールストレミング（スウェーデンで生産されている世界一くさい食べ物として有名なニシンの塩漬け）を食べたとすると、その時の臭いや衝撃的な情動を、なぜか自分が経験したことのように感じてしまうということだ。だがこれはあくまでも、器鏡を使っているときに限った記憶で、現実に戻った後は、シュールストレミングを食べた記憶や感覚は残らない。夢で見たことを忘れてしまうように。

もっぱら僕はあまりメタネーションがあまり好きになれないから、自分の分身に自由を与えたりはしない。僕は僕の夢に対して責任を持ちたい。

今日は、昔の海に用があつて多態器鏡まで来た。目の前の器鏡に触れると、ゆつくりと薈が開くようにハッチが開いた。片足ずつ中に入り、マッサージチェアに体を預けるように全身を器鏡内に収めた。頭をヘルメットののような器が覆つて、溶液が注ぎ込まれてきた。ここから麻酔にかかったように意識がぼんやりしていく。少し不安になるけれど、何度も経験したことだ。意識が遠のいていく前に、いくべき世界を思い浮かべる。これはあまり意味がないことだけれど、夢の内容を思い浮かべてメタネーションに移っていく

と、まるで自分で見たい夢をコントロールしている気分になれる――

海の中を泳いでいる。周りには仲間が並んでいる。どうやらうまくメタネーションの中に入れたみたいだ。ここは第一次世界大戦中の地中海。僕は、クジラのアバターとしてシュミレーションを開始した。この戦争ではドイツ軍の保有する潜水艦通称「ボート」が実戦投入されて、海中の環境を一変させた。僕は潜水艦が現れたことによってクジラたちがどんな気分だったのか、その影響がクジラたちにどう出るのが知れたかった。

このようにメタネーション内では、他の生き物に扮することができる。そもそも僕のバックグラウンドは日本人の血統が強いから、メタネーション内での基本アバターは、日本人として登録してある。メタネーションの中にあるどの時代にも、アクセスすることはできるが、それはあくまでも日本人としての立場に限られている。今回のように歴史の記録の中で、日本人がいなかったとされる地域で活動したいときには、他のものに扮するしかないのだ。他にも建造物や道具、食材になりきって世界の中を漂流することができる。まるで付喪神みたいだ。それも面白そうだからまた今度ゆっくりメタネーションを散策しようと思う。

僕はこれまで、いろんなイルカやクジラたちと言葉を交わして、その生態を研究してきたけれど、メタネーション内で実際にクジラになりきるのは不思議な感覚だ。長く水中にいるのに息が苦しくないし、尾ビレが強く水を押しつけて海中を進むことができる。けれど、クジラの生態からかけ離れた行動はできないようになっていいるから、人としての意識に囚われていると窮屈な感じもする。

こうして少しづつクジラの意識に寄せていくと、遠くから違和感のある音が響いてきた。ずっと同じ高さのまま流れている音が消えたり、また聞こえてきたり、小さくなったり、大きくなったりする。周りのクジラたちも声をあげてなんだか不安そうな感情が伝わってきた。僕も共鳴して不安になってくる。でも、この群れは好奇心が強いのか、僕の気持ち伝染したのか、音に近づいてみることにした。何せ、今までクジラたちが聞いたことのない音がするからだ。

音のありかは、今いる場所より少し深い場所のようだ。しばらく泳いでいると大きな黒い影が現れた。仲間たちは別のクジラだと思っているのだろう。しかし、奇妙な音を立てて進んでいくその躯体を眺めているうちに、コミュニケーションが取れないとわかり、より一層警戒感が増していった。これが「ボート」だ。海中を響いていた音は、潜水艦のスクリーンの回転音、音紋と呼ばれるものだ。

僕らの群れは潜水艦を刺激しないようにゆつくりとその場を離れていった。

それからしばらく海中を泳ぎ、浮上し、オキアミを食べて、海中で眠った。しかし、どこに移動しようとも音紋の気配は消えなかった。クジラは耳がいい上に、水の中は空気中よりも音がよく響く。群全体が少しづつストレスを抱えてきたようだ。

その時は突然やつてきた。

暗い海底を泳いでいると海面の方から音の塊が降ってきた。一瞬、海底地震の地響きが伝わってきたのだと思つたが、その時とは違う印象だつた。群れは硬直し、息を鎮めていた。続けて何度か強烈な音が鳴つた。これは恐らく魚雷の爆発音だろう。危険だと判断した群れは音から遠ざかるように泳いだ。時々、音紋や不穏な音に遭遇したけれど、十分に移動したのか、平穏な場所にたどり着いた。それから度々、遠くのクジラの群れから、警戒の鳴き声が聞こえてきた。おそらくはCボートに遭遇したのだろう。

それから長い時間が流れた感覚があつた。気がついた時には、視界の先に器鏡のハッチが開いていた。規定の時間が経過してメタネーションから自動的にログアウトしたみたい

だ。

しばらくクジラの言葉で話しながら、泳いでいたせいか、自分の体にひどく違和感を感じる。分類学上では、同じ哺乳類としてくることができても、身体の使い方や感覚はまるで違う。当たり前のことか。今はヒトの体を取り戻したことで、安堵に包まれている。どれくらい時間を器械の中で過ごしていたのかは忘れてしまった。器械のエントリー手続きで時代背景や環境、アバターを設定する際に、滞在時間も決めていたはずだ。海の間の中、クジラの体になると、人間としての時間感覚を喪失してしまうのかもしれない。できれば、最初に説明して欲しかった。まだ目覚めたばかりでぼんやりするが、なんとか器械を脱出して、メタネーション内でのログを解析をすることにした。

最初に設定していた自動ログアウトまでのリミットは、十日間だった。240時間。久しぶりのダイブで過去最長の滞在時間を更新してしまった。手動ログアウトの方法は、一定のリズムで、まばたき連続十七回だったけれど、ついには時間いっぱい使い切ってしまった。

でもその理由はしっかりと覚えている。心地よかったのだ。自分にとってクジラになりきるのは初めての経験で、メタネーションのクジラも環境の変化を前にさまざまな表情を見

せられた。クジラは人間が聞こえないような低い音を発することができる。低音が響き渡る海底の中で、ゆったりと大きな身体を操るのは、想像を超えた体験だった。ただそこに浮かんでいるだけでも気持ちがいい。そうしているうちに、本来の目的を忘れて、クジラの体からヒトの心が霧散していったのかもしれない。

もしも、より長期の滞在時間を設定したら、無事こちらの世界に戻ってこれるのだろうか。体は修復できても、クジラの体に適応した心は元に戻らないかもしれない。少し不安に思つて、無事ヒトであることをありがたく感じた。

歩きながら少しずつヒトとしての感覚が明瞭になってきた。地面を踏み締め、背筋を伸ばして腕を振る。足元には、一定の規則で並んだタイルが道を埋め尽くしている。これがヒトの有り様だ。

多態器鏡のエリアを出て、また欲望がひしめく空間に戻ってきた。突然お腹がなった。十日間何も食べていないんだ。器鏡に入っている間は、血液中に栄養を自動的に補給してくれるが、胃のなかは空っぽだ。オキアミをたくさん食べた気がするんだけど、少しも腹に溜まってくれていない。それはオキアミが小さいからではないと思う。今は温かいものが飲みたい。また、ソイミルクバナナシェイク、ホットに生クリームとハニーソーストッピングの出番だろうか。でも今は栄養バランスのいいものが食べたい。長く器鏡に潜つて

いたことでもあるし、スコアはたくさん稼げた。少し贅沢をしてもいいかもしれない。

城の中を巡りながら、美味しそうな洋食屋さんを見つけた。シチューが美味しそうだし、店頭の食品サンプルのホログラムに、ホクホクのポトフが写っていた。ここにしようと思ったけれど、一人で入るのは寂しかった。クジラだった十日間のことを誰かに話したい。そう思った時には、体が勝手にエアリアルをコールしていた。

「エアリアル、ティーマーだよ。さつき器械から出てきた。」

「おおー、お疲れい。長かったから心配したよ。体調どう？」

少し声に疲れが出てしまっているかもしれない。少し声のトーンを上げて話そうとしたが、変なところで声が裏返ってしまった。

「ふうん、大丈夫だよ。でもお腹すいちゃった。今美味しなお店見つけたんだけど、これる？夕飯食べようよ。」

「わかった、今飛んでるから、すぐ城まで行くね。」

店の場所を伝えてから通信が切れた。先にお店に入って、腰を下ろした。どうしても体から疲れが滲み出てしまっているみたい。さつきまでずつと寝ていたようなものののに、今すぐ、ぐっすりと眠りたい。ウトウトしながら、お通しで出てきたお茶を啜った。暖か

くて安心する。薄い緑のお茶で、煎茶よりもさっぱりしている。お碗を手で包んで温かさを感じていたら突然、涙が滲んだ。海の中は寂しかったのか、ヒトの身体の重みに安心したのか、二ボートの恐怖を思い出してしまったのか。

それから眠りこけてしまったところをエアリアルに起こされた。お店で寝るのはダメだとわかってはいたけど、我慢できなかったから許して欲しい。ご飯を注文してからは元氣になつて、器鏡の中でのことをたくさん話した。エアリアルも僕が潜っている間に試した、おニユーのカメラの話をしてくれた。お互いが知らないところで、全く違う景色を眺めていた。もしかしたら現実感というのは、他の人が感じているリアリティに共感することなのかかもしれないと、ふと思った。その話をしたらエアリアルは冷やかした。どうやらマセガキという属性を獲得したらしい。

それから食事を済ませてベースキャンプに戻った。久しぶりに土や緑の香りを嗅いで、戻ってきたことを実感した。そういえば、洋食屋さんで出されたお茶は川柳かわやなぎという茶葉で淹れたものらしい。飲んでから体がシャキツとしたし、なんだか特別美味しい味わいだつた。きつとあのお茶の味は忘れないだろう。

桐ノ間

ペンが

ペンがあつたはずだ。

どこだ
ペンを探さないと

確かその辺にあつたはず

バッグの中

ポッケの中

棚の奥

この細長い感触は

先が尖っている
見つかっただか

ペ
ン

あ
つ
た。

それからの先の記憶は斑^{まだ}らだ

青は覚えている

記録はある

丸と線を必死に書き殴った 次にこの景色が見られるのがいつかわからない

とにかく腕と指を走らせた 強く押し当てて 柔らかく引きずって 指で擦って

最初は 小さな点だった その点は近づいてくる

それから輪郭が現れた 彫刻刀の刃先の様だった

長い時間がたった 全身を使って描いた 肩を回し 足を揺すり 甲をつねった

その姿は巨大だった

それは暗闇の中で輝きを増す中 他の星は消えてしまった

色には奥行きがあつた

青の上に全ての色が重なっていた

ペンは 一色しかなかった

そんなことはどうだっていい

ただ目の前の 巨大な現実を描写することに意識がとられる

手首を煙のように燻らせる

描きながら 自分の感覚が 私自身が 削ぎ落とされる

感覚に落ちる――。

火星から出発したこの旅は、もうすぐ終点に迫り着く。長く退屈な旅だった。目に映る景色がどこまでも変わらない、白く滅菌された宇宙船の中。小さな窓だけが精神の通気口だった。けれど、自室の明かりを消して外を眺めても、不安を満たしてくれるものはない。それでも外を眺めないわけにはいかない。遠くに見える光の海以外には何も無い宇宙。

コロニーをいくつも経由して、何度も船を乗り換えた。それでも景色はずっと変わらない。宇宙船をたらい回しにされて永遠に終わらないかのように感じた。もう何回乗り換えたのかも忘れて、荷物のチェック、身体検査、抗重力トレーニング、人工知能によるカウンセリング、幾つもの行程を数えきれないほど繰り返した。そして退屈で無気力のまま、なんとか地球行きの最後の船に乗り込んだ。

生まれてきてから約九年の歳月を火星で過ごしてきた。地球の公転周期で考えれば、十

七歳くらいだろうか。

あと少して僕は九歳から十七歳になり、火星表面の3倍の重力に晒される。防護服を必要としない大気に包まれた、遺伝子の故郷に還る。

『ご搭乗の皆様、操縦室からご案内申し上げます——。当機はまもなく高度408kmの低軌道上に到達し、軌道ステーションとのドッキング態勢に入ります。現在より二分後にグリップサインが点灯する可能性があります。お手洗い等お済みでない方は、お早めにご利用ください。協力のほど、お願い申し上げます。それでは、到着まで宙そらの旅を、もう暫しお楽しみください。』

ガチャツと受話器を置くようなノイズが聞こえてからアナウンスは途切れた。別にトイレに行きたいわけではないが、地球がすぐそこに迫っていると思うと、気分が落ち着かない。一度お手洗いに向かった。

移動用レールに捕まって、通路を幾度か曲がった先の洗面所についた。何人かとすれ違ったが、個室のトイレは空いていた。もしかしたらもう二度と、無重力のトイレを使う

ことがないかもしれないと思って、記念にトイレの便器に座ってみた。便を吸い込む、この忌々しいトイレともこれでお別れだ。

結局、便器を使うことなく、さらけ出したお尻をしまつて洗面所に出てきた。湿ったシートで手と顔を拭いて、鏡に映った自分の顔をよく観察した。疲れもあつて浮腫んでいる感じもするけれど、重力がないと妙に顔の輪郭がまるくなる。まだ九歳の顔だ。地球に降りたときはどんな顔になっていたのだろう。

洗面所を後にして、来た道に戻るのにレールに掴まつたが、意外と時間が経つてしまつたのか、グリップサインが点灯した。船と軌道ステーションとのドッキング時に揺れるかもしれないので、近くの手すりに掴まつて、渡航用スーツの磁気拘束グリップのスイッチを入れた。これで衝撃から身を守ることができる。しかし、備えに反して、音沙汰ないまま到着のアナウンスが流れてきた。

『ご案内いたします。ただいま、軌道ステーションNo.332に到着いたしました。当機出入り口までの道のりは、フロアごとに誘導灯が点灯してまいります。もうしばらくお待ちください。この度は、当便をご利用いただきまして、誠にありがとうございます。またお会いできる日を、心よりお待ちしております。』

ついに着いた。いや、これから大地を踏むまでには、軌道エレベーターを降りた先の海城プラントから陸に向かわなければならぬ。けれど、地球の大気はもうすぐそこだ。気持ちちはやる。火星よりも遙かに大きい青の星に高まる期待と、無重力と暗闇の牢獄から早く逃げ切りたい気持ち体が突き動かす。ルールに沿って、客室に戻ってからはずぐに荷物をまとめた。

火星から持つてこられたのは、火星の頃に撮った仲間との写真と、エアクラフトのワッペンが縫い付けられたお気に入りのコート、そして一冊の本。たつた3つのアイテムだけだ。九年間、火星で過ごした証がこれだけ。それでもこの三つは入念に検査、滅菌されて、持ち込むのに苦労した。この工程は、火星で生産している植物の種子や、地球の汚染につながる物質を、限りなく完全に除去するために避けられないから仕方がない。

他の必要物資は、コロニーや宇宙船内で揃えた。衣類やバッグ、非常食と水筒、メモ帳とペン。メモ帳にはさつき夢中になって描いた地球の姿が写し出されている。それにしても、地球は本当に綺麗だった。生き物たちが三十五億年かけて作りあげた景色は、僕のことを奪うには十分すぎる迫力だった。でもまだ、それを上から見ただけだ。大地に降りて初めて、地球の魅力に出会えるのだろう。期待が高まる中、僕のいるフロアの誘導灯が点灯した。客室を簡単に片付けて、残っていた機内食のパンを口に放り込んでから通路に出

た。

通路のレールには、等間隔に人がぶら下がって、心地よい速度で船の出口に吸い込まれていった。ほとんどの人が、コロニーから、地球へ旅行に行く人たちだろう。中には、火星で夫役を終えて地球に帰って来た人もいるかもしれない。でもおそらく、火星生まれで初めて地球にくる人は僕ぐらいのものだろう。

流れゆく人々を観察するのに飽きてきた頃、人の途切れた合間を狙って、レールに飛び移った。船内は到着に合わせて、雄大な音楽が流れていた。地球のハーモニーをそのまま音にしているような曲だった。どんな人が作曲したんだろう。もしかすると、機械が作った曲かもしれない。

船の出口では、客室乗務員が上品な笑顔で見送ってくれた。火星やコロニー間の移動は、ほとんどが機械的に処理されて、人の温もりが感じられるサービスはなかったから、こうして笑顔で送り出されると気持ちがいい。でも向けられた笑顔に応えられずに、そそくさと船を降りて軌道ステーションのエアロックに移る。

軌道ステーション内は暗めの空間で間接照明が灯っている落ち着いたデザインだった。人の進行方向に合わせて光が流れるように動いていく。時々標識が現れて、軌道航路の乗

り換え便や、ステーション内のホテルへの道のりが示されていた。通路には、ところどころカフェやドラッグストアが並んでいる。『火星の多態器鏡』の中で見たような、昔の空港のように、高級ブランドの免税店やお土産を売っている店はない。広く長い構造物の軌道ステーションにしては少し寂しいような気もするけれど、昔の人たちが描いた近未来的なイメージが具現化している無駄のない設計だ。

レールを何度も乗り換えて通路を進んでいるうちに、開けた空間に出た。広間の中心には、食品店が固まって並んでいて、その周りには、スーツ拘束用グリップが椅子の代わりに配置されていた。奥はガラス張りの壁になっていて、壁の前に人が群がっていた。

海城プラント行きの軌道エレベーターが発する時刻まで、少し時間がある。それに壁の先の景色が気になった。飲み物を買いに、飲食店のカウンターに立つと、店の奥からスーツを着たヒトが優雅な足取りで注文をとりに来た。

『ようこそ。ご注文をいかがいたしましょう。』

あまりに自然だったから気が付かなかったが、店員はアンドロイドだった。ここは、ほとんど重力がない空間のはずだ。しかし、地に足をついて一歩ずつ進んできた違和感で気

がついた。それに、近くになると、服や体のあちこちにドロイドタグがついていた。

「ホットコーヒーを一つ。あとエスプレッソをワンショット。」

『少々お待ちを—— はい、どうぞ。温度は低めですが、ストローなので火傷に注意してください。レッドアイ・フライトでお疲れでしょう。ごゆっくりどうぞ。』

饒舌なアンドロイドだ。目の前に出されたコーヒーを自然と受け取ってしまったが、まだスコアを支払っていない。

「えっと、支払いは。」

『個人認証で既にお支払い済みです。軌道ステーション内は、自動の個人認証で、どこでも簡単にお買い物できますよ。』

「そうなんです、ありがとうございます。」

あまりのテンポの良さと、知らない機能に驚きを隠せなかったが、確かにセキュリティがしっかりした場所では、認証が簡略化されていてもおかしくはない。軽く会釈をしてから、受け取ったコーヒーを持って、スーツを近くのグリップに接続する。それから慎重に太いストローの蓋を開いて、柔らかな容器を押し出しながらコーヒーを飲む。ぬるいけれど、キツめのカフェインで、狂った体内時計が正常に戻った気がした。

コーヒを少しずつ飲んでいるうちに、壁際がなんだか騒がしくなってきた。気になったので、コーヒに蓋をして、壁際まで移動した。

人にぶつからないように慎重に移動して壁際にある柱に掴まった。壁の外には、ずいぶんと見慣れた宇宙の暗闇と、視界の下の方には、地球があった。壮大な景色に見入っていると、遠くの方からやたらとカッコいいデザインの宇宙船が複数機飛んできて、突然ドッグファイトを始めた。深刻な雰囲気はなかったが、目の前で戦闘が行われていると思つて心臓がヒヤリとした。

もし、ビームや弾丸が飛んできたらひとたまりもないと思つたが、この光景が見慣れたものであることに、すぐ気がついた。有名なスペースオペラ映画のワンシーンだ。この壁は、ガラス張りの景色に映像を投射しているプロディスプレイだったんだ。ビームを発射する音も流れているから、映画的な宇宙のリアリティはバッチリだ。

しばらく映像を見ていると、また景色が変わった。今度は、他の宇宙ステーションが近付いてきた。すると、画面の外から突然デブリが現れて、宇宙ステーションはバラバラに壊れてしまった。デブリと壊れた宇宙ステーションの破片から逃れるように、小さな脱出ポッドが地球に落下していった。映像を見ている人たちは息を呑んでその行先を見守った。これも映画のワンシーンなのかもしれない。

キヨロキヨロと周りを見渡しているうちに、広間の真ん中に操作盤を見つけた。近くまで行ってみると、小さなディスプレイに、さまざまな映画のサムネイルが表示されていた。これで選んだ映画のシーンが見られるんだ。ワクワクしてディスプレイを操作していたが、軌道エレベーターの出発時刻が近づいていることに気がついた。見たい映画があったのだけれど、断念してコーヒートを体に流し込んでから広間を離れ、移動用のレールに戻った。

軌道エレベーターの入場口まで辿り着いた。荷物検査と質量チェックを終えて、入城管理局の受付に来た。ここで個人情報と生体情報の認証を行う。受付の前は長蛇の列ができてゐる。僕は少しずつ緊張感を高めながら、チェックを待っている人が並んでいる中を少しずつ進んでいく。みるみるうちに人が受付の先に流れていって自分の番が来た。無愛想なプログラムから受付の前に来るように指示がきた。

『次の方、前方に進んでください——。認証しますので、両手の指をこの台の上にらせてください。指紋認証、静脈認証、虹彩認証、骨格整合完了。あなたのディレクトリは、火

星の地下開発、鉱物資源関係ですね。』

頷きながら、はいと答えて、落ち着きを装った。ここをパスできれば、地球行き最後のチケットが手に入るんだ。別にやましいことなんてないが、自身の記録を洗いざらい見られて、検査されるのはあまり気持ちのいいものではない。

『地球は初めてのようですね。ご存知かとは思いますが、火星と地球では、環境に常在するウイルスや細菌類が大きく異なります。上陸してからは、特に体調に気をつけてください。体内細菌の調整用カプセルはお持ちですか。』

「はい。」

『では、この先のゲートにお進みください。——次の方。』

こうして入城許可をもらい、軌道エレベーターに向かった。

指示されたゲートの先では、案内係のアンドロイドが笑顔で迎えてくれた。行き先を誘導されて、明るい空間に入った。目の前には、始まったばかりの椅子取りゲームのように、たくさんシートの円形に並んでいる。壁際にはハシゴがついていて、上下階に移動できるようになっている。どうやらシートが並んだフロアが何段か重なっているようだ。すでにエレベーター内に来てしまったらしい。ここまでスムーズにエレベーター内に入

るとは思っていなかったから、突然床下に100kmの落下コースがあるとわかって血の気が引いた。下を見たらダメとは言うが、見えなくても十分怖い。

足が止まって、一瞬たじろいだのを見抜かれたのか、アンドロイドが呼びかけてくれた。

『大丈夫ですか、気分がすぐれませんか。』

「あ、いや、大丈夫です。軌道エレベーターに乗るのが初めてで、ちょっと緊張してしまっただけです。」

『そうでいらつしやいましたか。当社の交通網は万全の準備と技術を持って運行いたしております。きつとお客様にもご満足いただけるでしょう。もし、よろしければお席までご案内いたしますでしょうか?』

とても柔らかない声色の音で、自然と心が和んだ。すると後方からヒトが近づいてくる気配がした。急に恥ずかしくなったので、案内の申し出は遠慮して、自分の席まで急いだ。

自分の席についてから、荷物を座席の下に入れて、柔らかそうなシートに体を預けた。シートベルトをつけると体が吸い込まれて、もう動けないような気がした。それでも不思議と圧迫感や不安でパニックになるようなことはなく、快適そのものだった。

座席でしばらく待っていると、少しずつシートにヒトが埋まっていつて、出発時刻が近づいてきた。ポーンと古風なエレベーターの音がすると同時に出入り口が閉まった。絶叫マシンに乗り込んでもう戻れないことを悟った時の気持ちが蘇ってくる。これから東京から大阪までの直線距離分を平均時速200kmで優雅に降りていくことができる。なんて素晴らしいことだろうか。純粹に真つ直ぐ降りていく。嗚呼、怖い。

いつ出発だろうかと震えながら待っているとアナウンスが流れた。

『皆様、ご案内申し上げます。この度は当社の軌道交通をご利用いただきまして、誠にありがとうございます。現在、エレベーターは順調に降下しております。海城プラント上層への到着はちょうど三時間後です。皆様のお手元の端末にはさまざまなサービスをご用意しておりますので、どうぞ快適な空の旅をお楽しみください。』

すでに落下中とのことだ。嬉しいような不安と、もうどうにでもなれと思いながら口角をあげた。

気を紛らわすのに、端末を弄り始める。降下ログをはじめとして、映画やゲーム、ラジオ、なんでもある。どうやら軽食も注文できるみたいだ。まるで昔の飛行機みたいで、宇

宙船よりずっと快適で退屈しないかもしれない。

いろんなコンテンツを物色しているうちに、近くの座席から、赤子の鳴き声が聞こえてきた。きつと不安になって泣き出してしまったんだろう。親御さんは慌てていたが、端末を操作して、シートについている提供用アームから小さな箱を受け取った。親御さんは受け取った箱から白いシートを取り出して、赤子の顔を撫でた。するとすぐに赤ちゃんは泣き止んでしまった。一体どんなものを提供してもらったのか気になって、端末の中を物色してみた。すると、さまざまなスマートドラッグが提供されているのを見つけた。

睡眠導入剤や、精神安定剤、アロマクリームや酸素吸入器などさまざま。エレベーターの上昇下降に際して、不安になる人がいるのを見越してこのようなサービスがあるのだろう。僕も気になったのでアロマクリームを注文してみた。手元のアームからすぐに提供されたので、早速使ってみた。あまり広範囲に香りが広がるものかしいたら迷惑かもしれないと思ったけれど、尖った香りではなく、自然と馴染むような香りだった。香りが立ってからすぐに慣れてしまったが、使う前より気分が落ち着いたかもしれない。前に多態器鏡で二十一世紀にアクセスした時、大阪から東京に移動する新幹線の中で、肉まんの匂いを撒き散らしている客がいたのを覚えている。きつと現実にもそうだったんだろう。アロマクリームの香りはあれよりはマシだろうし、迷惑ではないと信じたい。

それから眠たくもなく、暇を持て余していたのもあって、映画を見ることにした。器鏡のように高解像度とはいかないけれど、小さなディスプレイで見る映画も悪くない。

端末のインターフェースと格闘していると、ちょうど気になっていた映画がおすすめに出てきた。『In Time』というSF映画だ。全ての人類が二十五歳の容姿で老化が止まり、二十五歳の誕生日からは、労働の対価として時間を受け取る。この世界では時間が通貨。労働で時間を稼ぎ、所有している時間が尽きない限り生きることができる。しかし、永遠に生きることとはできない。

それに対して僕の生きている世界は、健康長寿の超高齢社会だけれど、いまだ不老不死を実現していない。それでも人々は、時間を気にして生き急ぐことはないし、通貨も無い。全く逆の世界だ。

映画も中盤に差し掛かり、少しは地上も近づいてきただろうと思ったところで、お手洗いにいきたくなってきた。さっきのコーヒーが原因だ。あまり我慢したくもなかったの
で、シートベルトを外して、立ちあがろうとした。しかしまだ体が軽いままだった。それはそうだ、エレベーターは加速中でまだ無重力に近い状態なんだ。背に腹は変えられない

し、映画の続きも早く見たいから急いでトイレを済ませた。無重力下だと気流で排泄物を吸い込む忌々しいトイレを使わなければならない。もう使う機会はないと思っていたのに、最悪の気分だ。

トイレを出てから、妙な表示が目に入った。『UPPER VIEW』『LOWER VIEW』。どうやらエレベーターの上下に展望室があるらしい。上の展望室が近かったので向かってみた。上階への梯子を登っていくと、すでに先客の気配がした。展望室の出入り口は空いていて、覗くと深い青の空が広がっていた。展望室に上がって景色を見たかったけれど、どうやら若い男女のカップルがいるらしい。気配を悟られないようにその場を後にして、シートに戻り、映画の続きをみた。

エンドロールが流れてきた。僕はこの時間が好きだ。もしエンドロールがなければ映画を見た気がしない。いろんな人が関わってこの映画ができている。気になった俳優の名前がわかる。よくわからない役職がある、でもきっと映画を完成させるのに必要な役職なんてなかったんだろう。そんなことを考えてしまう。今回の映画も面白かったし、あとで、メイキングとか探さないと。今時ディスクメディアは貴重だから、安いスコアでデー

夕閲覧できるかは怪しい。器械に潜ればすぐに見られるだろうけど、できればちゃんと昔のテレビとスピーカーで映像をみたい。

あくびがてら深く息を吸い込んで、凝り固まった全身の筋肉に血液を送り込んだ。周りのお客さんは半分が寝ていて、もう半分が端末に夢中になっているという具合だ。もうすぐ到着だろう。疲れた体を再起動したいし、せつかくだから展望室に行くことにした。

先ほど訪れた上部の展望室ではなく、下部の展望室へと向かった。なんとなく想像では床がガラス張りで、展望室に来る人の心を震え上がらせるようなものかと思っている。でも尚更怖いもの見たさで興味が湧いてくる。

フロアをいくつか降りて、展望室の前まで来た。恐る恐るドアを開けてみる。すると密閉されたカプセルの中にいたはずが、突然視界がひらけた。真つ青な空の下に広がるのは、雲海だった。

残念ながらペンはない。メモ帳も自分の座席に置いてきてしまった。でも、戻る暇があつたらこの景色を一瞬でも目の奥の網膜に焼き付けておきたい。

どこまでも透き通った世界が広がっている　これが大気

時間が経つ

雲の絨毯が近づいてくる

白い霧が立ち上ってきた直後　灰色の世界に包まれた

さつきまで白かったはずの雲　ガラス窓に水滴が滴る

音も変わった　不穏な風の音に撫でられて揺れる

しばらく景色が変わらない中、展望室を歩き回った。床は期待通り、一部ガラス張りのところがあつた。床に座り込んでガラスの床から灰色の景色を眺めていた。そしてその時は突然訪れた。

世界が真っ白になった。突然明るくなって、目が眩んだ。目を少しずつ開いていくと白い粒が飛びかかってくるのが見える。火星ではみる機会がなかった。はじめての雪景色。しだいに体が重たくなってきた。エレベーターの降下速度が下がってきたのだろう。嵐だと思っていた雪景色も、それが穏やかなものであるのがわかった。

ずっと、雪を見るのをやめられなかった。

そして、十七年間かかった5,759万kmの宇宙旅行は終わり、軌道エレベーターは海城プラットフォームに到着した。

エレベーターの筐体を降りた先では、灯籠を模した古風な電光掲示板に『Welcome back』と映し出されていた。今まで乗ってきた宇宙船や軌道ステーションの無機質で近未来的なデザインの空間から、解放されて味のある雰囲気になってきた。

人の流れに合わせて、通路を歩いていく。この通路は、大きな螺旋構造の下り坂になっていて、進むごとに少しずつ高度が下がっていく。できれば、宇宙空間のように、レールに捕まって移動できれば楽なのだけれど、すでに僕は重力の中にいる。多態器鏡でも地球の重力には慣れていたはずだし、最低限の筋力トレーニングも行っていたから、歩くこと

は問題ない。けれど、一步一步に体の重みを感じる。ここはずいぶん長い通路をひたすら歩かされるが、それは重力に体を慣れさせるためなのかもしれない。

ひたすら歩いて、もう2kmくらいたっただろうか、時々ソファーや椅子があつて、休めるようになっていく。僕は少しでも早く、大気に触れたかったから休まず進んでいたけれど、無理やり動かしていた関節が喘いできた。ここいらで少し休んだ方がいいかもしれない。進むうちに、空いている椅子を見つけて、腰を下ろした。

「よつこらしよ——。」

疲れて、変な声が漏れてしまった。道ゆく人は誰も気に留めていないようだったけれど、恥ずかしさで少しの間うつむいていた。それから、ふくらはぎと太腿、肩と腰を揉んで、軽くストレッチをした。これを先にやるべきだった。興奮したまま急いでエレベーターから降りてしまったのがいけない。しばらく体を動かしていると、目の前に一枚の絵が飾られているのに気がついた。この通路には、時折、写真や絵が壁に飾られてたり、映像が映し出されたりしたけれど、歩くのに必死で足もとを見ていたから注視してみてはなかった。

血流が四肢に取られて、絵の前で我を忘れたまま座っていた。この絵は、ピカソで有名なキュビズムの絵だ。誰が描いたのかは知らない。もしかしたらピカソかもしれないし、

他の誰かかもしれない。でもおそらく機械が作ったものでは無さそう。そんな気がする。絵に描かれた線や色、形を追っているうちに体が楽になって、息も整ってきた。荷物を担いでまた歩き出す。

それからは少し歩く速度を遅くして、壁の作品を眺めながら歩いた。一度にこんなにたくさんの芸術作品を見るのは初めてだった。器鏡の中で美術館や博物館に行ったことはあるけれど、実際に絵と向き合うと、器鏡とは全く違う緊張感がある。それに、火星には、火星の作品しかなかった。ここにあるのは地球の作品たちだ。

ひたすら歩いた。時々止まって、また歩いた。

自分が二足歩行生物であるという自覚を心と体に刻み込まれた頃、看板が現れた。

EXIT 500M

もうすぐゴールだ。ひとつの目的地に到着しても、またすぐ別の目的地に向かう。終点の次の終点。まやかしの到達点。やれやれ、一体どこまでいけば落ち着くことができるのか。でもわかっている。これからは火星にいた時よりもより、動き、流れされる体と日常

を実感することになる。地球の人たちは、家を持たない。一箇所に留まることなく
なるんだ。

今までの僕にとって安住の地は、多態器鏡の中だけだった。火星のあちこちをスーツを
着て歩き回る、仕事に明け暮れる日々。夢と無常の反復。やつとそこから逃げ出せたが、
この500m先の出口に、どんな日常が待っているのか。

EXIT 400M

EXIT 300M

、
、
、
、
、
、
、
、

EXIT 200M

、 、 、 、 、 、 、

EXIT 100M

、 、 、 、 、 、 、

螺旋の周回は終わって広場に出た。いろんなヒトが行き交っている。一瞬、たじろいでしまった。ここから一体、どうしたらいいんだ。どこに行ったらいいんだ。気がついたらポカンと空いてしまっていた口を結んで、なんとか雑な一步を踏み出した。ヒトの間をかき分けて、広場の中央に向かった。雑踏に隠れて遠くからはよく見えなかったが、巨大なジオラマ？のようなものが展示されていた。

ここのフロアは『^{きじ}雉の間』と呼ばれている。僕がジオラマだと思つたものは、『盆景』というものだつた。さまざまな盆栽が並んで、人工的な自然景觀を作り出していた。まさか標高12kmの城の頂上部に盆景があるとは思わなかつた。それに、こんなに奇妙で微細な表情を持つている樹々を初めてみた。感心しながら盆景を眺めて歩いていると、樹の合間から鋭い視線に覗き込まれていることに気がついた。

オスの雉と目があつた。その出立に意識が奪われて危機感を覚えたが、それはただの剥製のようだった。それでも、動かぬ^{まなこ}目に魂が宿っているように見えた。

それから長い間、盆景の周りを歩き回つた。なぜか飽きずにみていられる。時折、光の差し方が変わつて移ろう木陰の気配を楽しんでいた。この景色を見てみると、ヒトの雑踏の中にも静けさを感じて、氣に揺れる風の音や雉の鳴き声までもが聞こえてくるようだつ

た。

記憶の隅々に雉の間を描いてから、他にも面白そうなものがないかあたりを見渡してみた。どうやら、ここは海城プラントの案内所でもあり、DDによって運ばれてきた資産の集積場らしい。巨大なフロアがいくつもの層に重なって、博物学的資料が展示されている。おそらくさっきの螺旋の通路もこの一部なのだろう。ただ、他のフロアへの行き先や地図はあるのだけれど、フロア番号が書いてあるだけで、何があるかは明記されていない。どうやらこの不便な設計も仕様なのだろうけれど、流石に困り果てたので案内所の看板を指して歩みを進めた。

案内所には一人のお婆さんが座っていた。桐箱のようなものを慣れた手つきで開けては、周りに積み上げていく、貴賓ある方だった。僕が近づいてきたことに気がつくのと、一瞬こちらをみて、少し考え込んだ。それから僕が何かを言おうとすると、一枚の紙を手渡してくれた。紙には番号が書かれていた。この番号のフロアに行けということだろうか。お婆さんはこちらの考えを汲み取ったかのように、柔らかい笑顔を向けてくれた。表情に合わせて、皺がよっていく。お婆さんの生きてきた道のりが、顔に現れているようだった。僕はお婆さんに軽く会釈をして、とりあえず番号の書いてあるフロアに向かった。

フロアまでは、また長い道のりだった。とんでもなく長い旅をしてきた拳句、平衡感覚を狂わせながら、延々とぐるぐる歩かされて、次は展示物に目を泳がせながらひたすら歩かされる。筋肉がピリピリと痛み始めて、特に膝関節に負担がかかっているのがわかる。

そこまで重い荷物を持っているわけではないのが救いだった。目的地に着くまではさまざまな展示物に出会った。植物の種子や、化石、偉人の肖像画や奇妙に動く彫刻。それぞれのフロアにまとまりはあったものの、全体としてみたらめっちゃな構成だったような気がする。

中には目を向けたくないような場所もあった。ホルマリン漬けになった生き物がずらっと並んでいる部屋だった。そこに展示されている剥製は、まだ幼体の生き物がほとんどだ。より見やすいようにするためか、ホルマリン漬けの入っているケースを浮かせてゆっくり回転させていた。他の展示物にも見られたが、超伝導の磁気浮上で設置しているらしい。これならば地震が起こつても貴重な展示物を破損するリスクを減らすことができるが、もう命を失った存在が、浮き上がってクルクルと回っているのは悍ましい光景だった。そして回転する生身の死骸の魔力から、なんとか逃げおおせて（実際には興味をそそられた）、いくつかのフロアを抜けた後、目的のフロアに辿り着いた。

そこに鎮座していたのは、ジュラルミンの装甲に輝くP-51爆撃機だった。この飛行機はあまりにも有名で、見た瞬間にわかった。そして色々な記憶や思いが蘇ってきた。多くの個人のデータが筒抜けのこの世界だ。案内所のお婆さんは僕の来歴をのぞいたのだろう。とんでもないものを勧めてくれたものだ。それでもこのフロア周辺は、飛行に関するさまざまな資料が集まっていて、僕にぴったりの場所だった。飛行機やロケットに、鳥や虫、飛び上がる仕組みはなんでも揃っている。興奮を抑えきれず、ペンとメモを取り出した。そこからの記憶は斑らだ。

松ノ間

「君、〇ネームは？」

それが年が明けて最初に投げかけられた言葉だった。暗闇を灯す薄暗い明かりの機内で唐突に話しかけられた。僕はまた空飛ぶ箱に乗っている。

「私はエアリアル。バルーンクラフトに同乗させてもらうよ。よろしくね。で、君の〇ネームは？」

なんだか、距離が近い。深夜テンションで気が昂っているわけではなさそうで、元々の人柄なんだろう。勢いに流されるまま口が開いてしまった。

「えっと、まだ決めてなくて。」

「そっか、ディレクトリの切り替え中？」

「そんなところ。」

そっけなく返したつもりだったのに、より興味をひいてしまったのか。このエアリアルとかいうヒトは身を乗り出してきた。

「へえー、若いヒトって今時少ないからさ。気になったんだ。でも、そしたらどうやって

呼べばいい？」

呼ばれなきやいけない理由でもあるのか。なんだか妙な人が乗り込んできた。急に緊張感が高まったせいで、少し強い口調の声が出た。

「まだ決めてないんだ。好きに呼べばいいだろう。」

「うーん、じゃあ私の被写体になつてよ。その間のロネームは——、『マニ』でどう？服を着せるマニキンからとった。仮のモデルつてことで。」

眉間をつまんで、狼狽えてしまった。なんだこのヒトは、馴れ馴れしいにも程がある。静かな空の旅になると思っていたのに台無しだ。諦めのこもったため息が漏れてしまった。どうしてこうなった。

「ごめん、気を悪くしたかな——ごめんなさい。」

急に僕が悪いような気がしてきた。まあ、ただの会話だ。気にすることはない。地球にくればこれくらいのことはあるだろう。

「別にいいよ。わかった、しばらくの間『マニ』で。」

「よかったあ、私いつも空の写真を撮ってるんだ。だからあんまりヒトを撮る機会が少なから楽しみ。これから初日の出を撮るのにも最高のモチーフだよ。」

声は何色にも彩られるように、話し方が変わっていく。地球人はこんな奴らばかりなの

か。できればそうでないことを願いたい。話疲れて火星へのホームシックが加速しそうだ。それからもずっと濁流のように話されているうちに、ようやくプロペラが回り始めた。バルーンクラフトは飛びたった。

僕は、軌道エレベーターから降りた先の、城でずいぶん長い間過ごしていた。早く陸に行きたい気持ちもあったのだけれど、見たいものも、見るべきものも多すぎた。それに、体を地球の重力に慣らしていくのにもよかった。十七年間地球の重力の3割程度の惑星で過ごしていたんだ。ウォーミングアップはしつかりしたほうがいい。それでも一度、あまりの疲労で、肉離れと関節痛を起こしてしまったので、器械の中にアクセスして、傷が癒えるのを待った。それで気がついたら年明け間近になっていて、これを気に外に出ようと思った。

それから何を思ったのか、空輸サービスの広告が目止まって、スカイダイビングで空から陸に向かう為に、バルーンクラフトに乗ってみたところだ。もしかしたら、これが火星入初のHALO降下になるかもしれない。

しばらく暗闇の中を飛び続けた。エアリアルは次第にカメラに夢中になり、あれやこれ

やとレンズを変えたり、設定をいじくり回しているようだった。今まで撮った写真も見せてくれた。カメラの小さな画面だったけれど、魅力的な写真だった。

「どうして、空を撮っているの？」

自然と口にしてしまった。人のディレクトリについて聞くのは、なんだかタブーなことのように思つて、恥ずかしくなった。誰もが、自分の生業を選ぶのに、簡単には説明できない理由があるはずだ。それを初対面で聞くのは気が引ける。エアリアルも驚いたような顔をして、少し口角を上げたまま、そっぽを向いてしまった。

「――夕焼けに恋をしてしまったから。」

絞り出すような小声でそう言った。まさかそんな返しが来るとは思っていなかったし、あまりに恥ずかしい言葉の並びで笑いが込み上げてきてしまった。

「あー、ひどい、笑うな、今の無し！」

「いや、だって、あまりにも、つつつつつつはあー あははははは ごめん、止ま

らなくて——」

おかしさが伝染ったのか、エアリアルも笑いはじめて空間の秩序が壊れてしまった。でもこれでよかったんだと思う。久しぶりに笑った。

「御二方、どうかしましたか。」

パイロットが気になったのか話しかけてきた。

「いえ、なんでもありません。」

「いえ、なんでもありません。」

セリフがダブってしまった。またおかしくて笑った。

「忙しいお客さんですね。もうそろそろ降下地点です。東の空も少しずつ白んできましたよ。」

窓の外を覗いたエアリアルはそそくさと動き始めた。荷物を整理しているみたいだ。僕

も降下の準備に取り掛かった。搭乗前に受けていた説明によれば、リュックを背負って、PNの音声に従えばいいらしい。

「1、2、3、4、5、6、7、ラッキーセブン全て揃っている。」

「おまじないか何か？」

「いや、これはおまじないじゃないよ。毎回ルーティンで荷物を確認するのさ。一個でも忘れちゃうと、せつかくのシャッターチャンスが台無しになっちゃうからね。」

1がメインカメラ。

2、サブカメラ。

3、レンズケース。

4、スタビライザー。

5、非常食セット、ドライフルーツとか、ゼリーが入ってる。

6、緊急浮上装置。

7、PN搭載機動パラグライダー。

マニは、荷物大丈夫？」

「新しいDネームで呼ばれると調子狂うな。僕が持っているのは、城で揃えたサバイバルキットと貴重品、あとは降下用のパラシュートだけ。あくまで降下用だからエアリアルほど長くは飛んでいられないと思う。」

「そうだね、いい写真が撮れるといいな。」

それからは御来光を待った。一か月前には宇宙にいた僕が、地球の大気から宇宙に浮かぶ、炎の塊が登ってくるのを待っている。空が紺色のベールを脱ぎ捨てて、白い光が走った時、エアリアルが聞いてきた。

「どっちが先にいく？」

正直に思う、降りるのが怖い。先に降りるのも、後に降りるのも、どちらも願ひ下げたい。思わず後ずさってしまった。

「お先にどうぞ。」

エアリアルがじつと表情を覗き込んできた。

「もしかしてはじめて？」

圧力に負けて、頷いた。一般常識で考えてみよう。メタネーションで見た通り、スカイダイビングは昔からあるアクティビティだ。でもそれは、初めて飛ぶ時は、トレーナーが同伴して補助を受けて降りるんだ。今回は、地球の重力加速度歴1ヶ月の僕が、人工知能のナビゲーションだけで、ただ移動するただけに、飛び降りるのだ。やめておけばよかった。城を降りてから水路で向かえばよかった。

「私は準備できたよ。マニは大丈夫？」

再び頷いた。その瞬間、腕が持ち上がったと思ったら、目の前に絶空が現れた。合気道か何かの体術で体を引き寄せられて、床の際で体きわを拘束されようだ。そんなことを考えている場合じゃない。悲壮な現実が目の前にある。

「つて、何するんだ。放せ！」

「いくの、いかないの？ 情けないこと言うなよ。」

「いくに決まってるんだろ。だから放せ！」

「そっか——風の唄をきけ——。」

「えっ——うわっ

我に返った時には、口から想定外の量の空気が飛び込んできた。フレッシュエア―飲み放題、無料だ。けれどそのすべての空気を吹き飛ばすくらい叫んだ。何も頼るものがない中、必死に体を捻り続けた。

ようやく安定する姿勢をとれたところで、上からエアリアルが追いついてきた。こいつ、絶対許さない。必死に罵倒したが、おそらく聞こえていないだろう。エアリアルはこの状況を楽しんでニンマリ笑ってやがる。それから口元に人差し指を立てて、静かにと合図を残してから、そのまま遠くに飛び去ってしまった。

気が落ち着いた時には、世界は再び暗闇に包まれていた。もう本当に死ぬのかもしれない。実際にそう思った。地上までの高さもよくわからない。静かに諦めを噛み締めているとそれが安心感にも思えてきた。

『警告、危険高度に到達、オートパイロットを起動します。』

どうやらまだ死なないらしい。パラシュートは開いて、体が重さを取り戻した。そしてしばらく空中に漂い、二度目の御来光を網膜に収めた。上空ではエアリアルが縦横無尽に飛んでいる。明けましておめでとうクソ野郎。

地上が近づいてきた。パラシュートのロープを握る手に自然と力が入る。着地に備えてバランスを整える。浅い角度で降りていく。

最初の数歩は走るように着陸できたが、突然重たくなった体重に耐えられず、枯れた芝と土の上に転げてしまった。体に変な匂いが媚びりつく。これが、草と土の匂い。地球の匂い。大の字になって背中を地面に預ける。エアリアルがゆっくり降りてくるのが見える。冷たい風になでられて、気持ちがいい。そのままゆっくりと目を閉じた。

カシャカシャ、シャッターを切る音だ。なんだエアリアルが来たのか。そのまま目を瞑ってる。カシャカシャカシャ。まだ撮られているらしい。

足音が遠のいていった。風に乗ってシャッターを切る音が聞こえてくる。起きあがろ

う。息を吸い込んでから、体に力を込める。ムクリと上体を起こしてエアリアルの方を向く。そしてシャッターを切られる。

「マネキンさん、元気？」

カメラ片手にエアリアルが近づいてきた。もうパラシュートをしまったのか。近づいてくるそのヒトの姿は、妙に様になっていた。

「お陰様でね。にしても酷いじゃないか。時代が時代なら裁判じゃ済まないよ。」

「そうだね——そう、あれだけ笑われたからね。いつやり返してやろうかと思つてたんだ。報復だよ。」

さつきまでの軽い表情の動きからは想像できない、無慈悲な視線と声色を突き刺してきた。生半可じゃない圧力に背筋が凍った。地球人、怖すぎる。

「嘘ウソ、ごめんね。冗談だつてば、私ぜんぜん気にしてない。はい、手かすよ。」

地球人恐れ。生き物つてこんなに感情の緩急をつけられるのか。知らなかった。差し出された手を掴んで、立ち上がった。エアリアルの手は冷え切っていた。

「ふう、寒いね。パラシュートしまうの手伝うよ。火焚いて早くあつたまろう。」

それから、転げ落ちた芝生の足跡を残して、風の当たらない木陰に移動した。僕は歩き

ながら木の枝を集めて、エアリアルは火をつけてくれた。

「エアリアル、せっかくの日の出だったのに、随分早く降りてきたじゃないか。よかったのか。」

「うん、別にいいんだよ。いつも通り、綺麗な空だった。それがわかれば十分さ。あんまりマニを待たせても悪いし。そもそもディレクトリの登録では、夕日が私の専門だからね。モーマンタイだよ。」

エアリアルは、あつけらかんとした様子で火に枝をくべていった。火が大きくなってきた、僕もあたたまろうと火の前にしゃがみ込んだ。

「あんまり火に近づいたらダメだよ。いま化粧水持つてないんだ。肌パサパサになっちゃうよ。」

そう諭されて、いっぽ引き下がった。それでも手を伸ばして少しでも火の温もりを吸収しようとする。

「そういえば、君、地球の人じゃないでしょ。どこから来たの。コロニー？」

驚いた、なんでわかったんだらう。でも自分の出自をしゃべるのは気が引けた。かなりレアなケースだからだ。

「うん、地球には、初めて来たんだ。でもコロニーじゃない。」

「——ふうん、そつか。」

沈黙が訪れた。でも嫌な静けさじゃない。風の音と、太い枝が爆ぜる音が綺麗だった。体も少しづつ温まってきた。

「私も来年、夫役で行かないといけないんだ。——火星、でしょ。」

なるべく印象に残らないように頷いた。

「あそこは、あまり楽しいところじゃないよ。まあ、でもそんなに悪いところでもないから、気負わなくて大丈夫。」

「ありがとう。ちよつと心配だった。今は地球の景色を忘れないためにも、たくさん写真を撮ってるんだ。ほら、見てよ。さっきもいい写真が撮れたよ。タイトルは、そうだな

——宙にうなだれる火星人？」

カメラのディスプレイには、真上からのアングルで、パラシュートを開く前の脱力した僕が、写っていた。もしかして落下しながら、撮ったのか。すごい技術だ。

「妙なタイトルをつけるなよ。凶星じゃないか。」

エアリアルは嬉しそうだった。きつと写真を撮るのが大好きなんだろう。

「そうだ。新年だし、心機一転。私もディレクトリ変えよう。火星人を撮れる機会なんてなかなかないんだ。引き続き君を被写体として撮らせてよ。」

「なんだよ唐突に。僕をとつても仕方ないよ。自分の大事なディレクトリを簡単に変えるもんじゃないだろう。」

エアリアルは、静かな視線を向けて口を開いた。

「私たちは、いかなる理由があろうと、どのような出自であろうと、秩序の許す限り、その探究心を妨げられることはない。それがここのルール。私がディレクトリを変えたら、秩序がみだれる？」

「乱れるかもしれない。それにプライバ——」

「プライバシーなんてこの地球上には残ってないよ。やっぱり君は他のヒトと違う。俄然興味が湧いてくる。」

さつきからずっとエアリアルのペースで散々だ。どうせ僕に拒絶する権利なんてのも地球にはないんだろう。

「わかったよ、好きにすればいい。」

どうせしばらくしたら、またディレクトリも変わるんだ。

「ありがとう。そうしたら私の〇ネームは何がいいかな。申請した時に誰かと被つて、却下されても困るしなあ。でもかつこいい名前がいいしなあ。」

「んー。『パスファインダー』なんてどうだろう。初期の火星探査計画のマーズ・パスファ

インダーからとったんだ。この時の計画で探査機が火星の写真をたくさん持ち帰ったらしい。パス。呼びやすいし。」

名無しのヒトは、目を輝かせている。

「いいね！さすがは火星人。パス、パスファインダーで決まり。そうと決まったら早速手続きしなくちゃ。早くエアリアルを返還し——」

どこかへ飛び跳ねていきそうな勢いを必死で止めた。

「待つて、まだ寒いよ。もう少しあつたまつてからにしよう。」

腕を掴んだら、パスはフリーズしてしまった。程なくして再起動する。

「ごめんごめん、そだね。火もあるんだし、お湯入れよつか。」

パス（仮）は金属の筒を取り出して火に焚べた。どうやら水が入ってるらしい。今思えば、パスがいてくれてよかったと思う。命に関わることは起きないにせよ、フィールドに降りてから手解きをしてくれるヒトがいるのはすごく助かる。

「マニは、Dネームどうする？ダイレクトリまだ、決まっていなくていいでしょ。スコアを稼ぐためにも決めるなら早い方がいい。」

そうだな、火星の時のダイレクトリは、ここでは使えないし。腕を組んでぼんやり考え

た。

「やりたいことはあるんだけど、それは探求対象にするのとは、ちよつと違うんだな。」

「やりたいことって？」

「ドローンレースにでる。」

パスは頷きながらこつちを見ている。早く次の言葉が来ないか待っているのだろう。まあ実際、ドローンレースに出られればいいんだ。ディレクトリにそこまでこだわることもないか。

「うーん、ディレクトリは盆栽関連にしよう。」

パスは不思議そうな顔をしている。

「なんで急に盆栽？ドローンとまるで反対じゃないか。年寄りくさいし。」

「全く、遠慮なく言ってくれるな。でも興味があるのは嘘じゃない。火星には木材生産用の数種類の樹木しかなかったんだ。それで地球に来てから、城で盆栽を見たんだ。感動してしまつて——。いいと思うんだけど。」

「そっか、あの盆栽を見たのかあ。軌道エレベーター使う時に私も見たことある。盆栽で

もいろんな種類があると思うけど、ディレクトリの下層はどうする？」

またしばらく悩んだ。でもすぐに決めなきゃいけないわけでもないし、保留することにした。

「とりあえず盆栽、他は後で考えるよ。」

僕の呼び名はマニで継続。パスは肩をすくめて、物足りなそうにしていた。

それからゆっくり焚き火の前で待ちながらお湯が沸くのをまつた。パスも疲れを癒すためか、横になって目を閉じていた。炎の揺らぎをじつと見つめながら、枝を足していく。コポコポと聞きなれない音と共にパスが起き上がった。自前のバッグの中をゴソゴソとかき回していく。

「あつた。」

あつたらしい。何があつたのかは知らない。またバッグの中をかき回していった。

「あつた。」

あつたらしい。

「ない——。」

なんてことだ。ないらしい。

「マニ、器とか持つてないよね。」

「ああ、持つていない。」

「そつかじゃあ後で作らないとね。とりあえず、今は器一個しかないから、回し飲みしよう。」

パスはバックの中からドライフルーツと竹のコップを取り出して、沸かしたお湯で、即席ドライフルーツティーを作った。

「ちよつと冷めるまで待たないとね。味はほとんど白湯だけど、きつと美味しいよ。」

お先にどうぞとコップを渡してもらった。竹からじんわりと伝わってくる熱が暖かい。とてもいい香りがする。

「せつかく地上に降りたのに、ドライフルーツなんてごめんね。私あんまり野草とか詳しくないから、なかなか現地調達というわけにはいかないんだ。」

「全然気にすることないよ。このドライフルーツは火星産かな。」

「城で安く手に入れたやつだから多分そうだと思う。」

「ふーん。でも僕には故郷の味みたいなものだから、むしろ安心するよ。」

そういつて、少し口をつけてみたけれど、まだ熱かった。火傷してしまった。

「あらら、猫舌なの。」

貸してみ、みたな素振りでコップを要求してきた。そのままパスも飲もうとしたが、火傷したようだ。ざまあない。

それから息で冷ましてからコクコクと飲み進めた。どうやら美味いらしい。お前もやれと言わんばかりに、コップを渡してきた。ちょうどいい温度になつて美味しく飲めた。それでもあんまりドライフルーツの味はしなかった。

お茶で冷えた体にエネルギーが行き渡った。それから火を消して電鏡に向かった。話には聞いたことはあるが、僕は電鏡のなんたるかをよく知らなかったけれど、パスが色々と教えてくれた。とりあえずフィールド上に点在している素敵グッツらしいことはわかった。トラブルが起こつても、電鏡まで辿り着けば大抵のことはなんとかなるとのこと。

「電鏡に行ったら、私とマニのロネームを変更して、あとは弟と待ち合わせなきゃ。」

「弟がいるんだ。今は何をしているの？」

「弟はイルカの研究をしていても海にいます。年初めは毎年、初詣で房総半島の方にある海底神社に行くとか言つて、いつも震えながら帰ってくるんだよ。おもしろよ。」

「きつと年明けて名前が変わつてたら、弟さんびつくりするだろうね。」

話しているうちに、電鏡にたどり着いた。まだ僕のディレクトリを決めかねていたの
で、先にパスが手続きを始めた。

「ディレクトリの変更つと——これで申請完了——却下あ??」

「突然でかい声を出すなよ。どうしたのさ。」

困惑して不貞腐れている。

「対象のディレクトリが不明瞭で、登録できないってさ。確かに、火星人の生態研究で写
真を撮るつてもよくわからないけど、ここに火星人がいるんだから成立するはずじゃ
ん。」

「あんまり火星人っていうなよ。なんか宇宙から来た侵略者みたいに思えてくる。むしろ
こっちの方が地球に苦労させられてるのに。」

パスはぶつくさとか言つて、僕の話は聞いていないらしい。パスをどかして僕も手続
きを始めた。

ディレクトリの変更手続きを始めた。これは火星の時と変わらない。キーワードをもと
に対象を絞っていつて、探求対象の例をいくつか提示してくれる。もし、そこに該当する
ものがなければ、新規項目を手動で作ることになる。今回は盆栽をキーワードに、いくつ

かの盆栽に関する探求項目が提示された。あまり下調べをしてはいないけれど、良さげな項目があつた。

赤松盆栽（分類省略）日本列島関東地域周回管理：

これが僕の新しいダイレクトリになる。関東各地にある赤松の状態の確認や、剪定、お世話をやっていくことになる。

地球では物資の移動は〇〇や空輸で限られたものしか認められていない上に、植物の移動は禁止されている。植物の移動をすることで生態系が著しく乱れた歴史によるものだから盆栽として管理していた樹々を動かせなくなつてから、ヒトが移動して管理するようになったようだ。中には千年を超える樹齢の盆栽もあるみたいだ。とても楽しみ。

「パス。ダイレクトリはこれに決まつたよ。〇ネームはどこからとろうか。」

「写真を撮るだけの私と違って、わりと総合的に色々やるみたいだね。あんまり特徴がないから赤松からとるかな——。松だしパインでいいんじゃない。カワイイし。」

こうして、僕は『パイン』として盆栽の管理者らしからぬフレッシュな〇ネームを手に入れた。パスも再度自身のダイレクトリを新規項目で申請して、変更が受理された。

電鏡の場所では、パスの弟と待ち合わせるつもりだったのだが、まだ到着には時間がかかるみたいで、ベースキャンプで落ち合うことになった。僕はまだ急ぎの用もなかったの
で、パスのベースキャンプに招待されることになった。

パスが電鏡で操作を終えてから五分ほど待つように言われたので、近くを散策した。さまざまな生き物や植生で溢れていて、ただの林なのにすごい情報量だ。地球の景色には器
鏡で慣れているはずなのに、こうして本物を見ると、その精巧さに圧倒される。緑だけで
も数えきれない色の種類があつて、一枚の葉っぱにグラデーションのような色の揺らぎも
見られる。虫食いの葉っぱも可愛らしい。メモとペンを取り出して、気に入った形のもの
があつたら、簡単にスケッチした。その姿を紙に起こしていくと、一見気が付かないよう
な細部まで生き物の構造が頭になつていく。器鏡も素晴らしい技術だとは思うけれど、こ
れほどの解像度ではない。それは言葉にして比較するのは難しいけれど、本物は明らかに
違う。独特の魅力を放っている。この世界を、火星のみんなにも見せてあげたい――。

夢中になつて、スケッチしていると、林の奥からパスに呼ばれる声がした。キリのいい
ところでメモをたたんで、パスの下に向かった。どうやら林の先に開けた原っぱがあるら

しい。木々を掻き分けて進んでいくと、パスの前に巨大な蜘蛛がそびえ立っていた。高さが3メートルを超えるその体軀は、動かずしても恐ろしかった。顔は引き攣り、血の気が引いたところでパスがこちらに気がついた。

「そんなに怖がらなくても大丈夫だよ。これは『雪迎え』っていつて移動用に使うクローラーだよ。近くにいたから電鏡で呼んだんだ。」

「クローラー？明らかに蜘蛛じゃないか。それも特大の。」

「確かに年季入ってるからね。苔やら錆やらで、いつ見てもすごい迫力だよ。でも捕まえられて食われたりはしない。」

恐る恐る近づいていくと、幾つもの目がギョロギョロと動いて僕の姿を捉えたようだ。

こんなに恐ろしいものが平然と出てくるなんて、地球は恐ろしいところだ。これからどれほどの不安を煽られることになるのだろうか。

「雪迎えはね、蜘蛛のバイオミミクリーから作られたドローンの一種で、地上と空の移動を手助けしてくれるんだ。コイツを使えばベースキャンプまですぐだから、とりあえず背中に登って。頭胸部の横から上がれると思う。」

覚悟を決めて巨大な足の間をくぐりながら登れそうな突起を見つける。僕が登り切る前

に、パスはクローラーの上で待っていて手を貸してくれた。クローラーの上はかなりいい眺めだった。大型の馬よりも遥かに高い視点だから、背の高い草むらに囲まれた場所でも遠くまで見渡せる。

「一応ベルトがあるから、使った方がいいよ。これだけ大きいと地面の移動は推奨されないんだ。飛び上がるから、かなりの〆がかかる。」

パスの指示通りに準備を整えた。

「じゃあ出発するからね。脱力していた方がいいよ。あんまり力んでると失神するかもしれないから。」

「やれや——。」

力む暇もなく上空に体を投げられた。下は見えない。見てはいけないんだろう。それから一日ぶりの無重力を感じて、気を失った。

頬が痛い。頭が揺れる。なんだ、器鏡の中か。

「パ・イ・ン！ 起きろ！」

幽体離脱から体重を取り戻した。

「わかった、わかった、そう何度も叩くな。」

「もうキャンプの上空に着いたから降りるよ。」

降りる？

「このまま着地したらキャンプが埃まみれになっちゃうからね。ほらベルトこつちに付け替えて。」

どうやら巨大な蜘蛛の機械は飛んでいるらしい。浮いているのか、ぶら下がっているのかよく分からない。立ち上がって周りを見渡すと高層ビルの高さくらいにいるらしいことがわかった。少し誇張しているかもしれないが、それくらい高く感じた。もう一度氣を失いたい。

「降りるって、どうやってさ。」

パスは白いロープのようなものを掴んでいた。

「蜘蛛の糸だよ。さ、いくよ。」

蜘蛛の糸の先端を体にくくり付けてある。いつの間にか僕にもつけられていた。そして

蜘蛛の腹の部分から二人揃って、ゆっくりと伸びていく蜘蛛の糸に下ろされた。

「はじめて失神したよ。全く酷い目に遭った。今大地を踏みしめられることが幸せ。」

「それはよかった。これからもよく使うから、きつとすぐに慣れちゃうよ。」

地球人は皆こんなものを使うのか。空を飛ぶことも臆さない。決して他の生物と比べて頑健と言える肉体を持っているわけではないのに。

「純粹に不思議だよ、どうしてそんなに平気でいられるんだ。パスは確かに空を飛ぶのが専門職だろうけど、一歩間違ったら命に関わるじゃないか。」

パスは不思議そうな顔でこちらを見ていた。なんでそんな当たり前のことを聞くのかと、私の方が困惑すると言わんばかりに。

「流石に死にはしないよ。怪我をしても治せばいいじゃないか。それに万が一死んでしまったとしても、私たちは自然の一部なんだし、当たり前のことだよ。」

死ぬのが当たり前というメンタリテイの若者に地球の歩き方をレクチャーされている。本当に大丈夫なのだろうか。

「元火星人には理解し難い。」

だろうね、と笑い飛ばされたが、とてもじゃなけど笑えるような気分には慣れなかつ

た。ネガティブな雰囲気を感じられたのか、パスが続けた。

「ほら、着いたよ。ここが私たちのベースキャンプ。つていつでも大したものがあるわけじゃないんだけど、その繭にでも腰掛けてて。」

「繭って、この白いふわふわしたやつ？」

パスは頷いた。おそらく『流繭』^{リウケン}つてやつだろう。海城プラントに生活圏を移した人類が、自然のフィールドで最低限安全を確保できるように開発した、自在に伸縮と硬化、成形機能がある繭型の寝床。実物は初めて見る。

「座るって、そのまま腰をおろしていいの？」

「そうだよ、座ると体にフィットするように形が変わるから、試してみて。もし硬くしたいとかだったら、こっちから操作するよ。」

手首についている端末を指差しながら教えてくれた。実際に腰を下ろしてみると、全身の重さがうまく分散されていい座り心地だった。なんだか一度座ると立ち上がる気が失せてしまうような快適さがある。これで日向ぼっこしたら最高だろうな。

しかし、心地よかったのも束の間だった。背中の流繭がモゾモゾと動いて、お尻の高さが下がったと思った直後、背中側にあったはずの白い塊が広がって、視界を覆い尽くした。全身が繭の中に閉じ込められた。

「おい！パス。何するんだ。出せ。」

外では笑い転がっている声がかすかに聞こえてくる。少しだけ壁に穴が空いてパスが顔を覗かせてきた。

「これでパインの出荷準備は完了だね。」ニタニタと笑いながら見下ろしてくる。流石に向つ腹が立つてきた。この地球人と知り合ってから、まだ6時間も経過していない。

「ここは地球。自然の世界は弱肉強食だよ。ちゃんと警戒しないと危ないからね。」

久しぶりに殴りたいと心から思った。だが勝ち目がないのは目に見えている。顔を可能な限り歪めて声を絞り出した。

「ああ、肝に銘じておくよ。」

盆栽にかまけている場合じゃない。いつか必ず、予想外の何かで罠にかけてやる。上空から落とされたことも忘れてない。急に昂つたストレスに耐えていると、聞き慣れない音声が届いてきた。

『マスター。何やってるんですか。強いストレス値を観測しましたよ。』

「あ、バレちゃったか。お客さんが来たからおもてなしをしていたんだよ。」

『とりあえず、この方を出してあげなさい。』

音の主は人工知能の『Z』らしい。繭は再び形を変えて、座り心地のいい椅子に戻った。『せっかくのお客さんになってことするんですか。』

「いやーつつい。面白くなっちゃつて、このヒトおもしろいんだもん――。」

そうだ、紹介しなくちゃ。こちら私の『Z』のソランチュ。で、この大事なお客様はパイン。火星からきた宇宙人。」

パスの胸元のアクセサリーを指さしてソランチュを紹介してくれた。

『明けておめでとうございます。そして初めましてパイン様。新年早々ウチのマスターがご迷惑をおかけして申し訳ありません。』

「どうやらまともなのは人工知能だけらしい。」

「いや、はい。明けておめでとうございます。ちなみになんだけど、君のマスターを一発殴つてもいいかな。」

『はい、問題ありません。本日のマスターの無礼っぷりに、辟易していたところです。私の代わりにもぜひどうぞ。』

ソランチュが話おわると同時に間髪入れずに全身の力を込めてゴムのように腕を伸ばしたが、軽く躲された上に、手首を掴まれた。気がついたら僕が跪かひざまずされていた。

『あちゃあ——。マスター。大人気ないですよ。』

「いや、結構いいのが飛んできたから咄嗟に動いちゃって。手首の関節きめちゃった。」
地球に来たばかりだから仕方がないが、知らぬ土地のルールをよく知らないということに
どれだけのリスクがあるか身をもつてわかった。わかりすぎた。それでもここまで完膚な
きままでにやられると、逆に清々しくなってくる。笑いが込み上げてきた。

「あ、パインが壊れた。」

ひたすら笑うことにした。それから笑いは地球上で最も残虐な生き物が発明したことを
思い出した。

『マスター。』

「パイン、ごめん。」

パスが手を差し出してくれた。一瞬はねのけてやろう思っただけ、どうにもパスを憎
めない。手を借りて立ち上がった。

「パス。いつか絶対にやり返すからな。」

「わかった。」

お互いの目をしっかりと見据えたまま、手を握った。一年の計は元旦にあるらしいが、今は気にしないことにした。

それから程なくしてベースキャンプに濡れた少年が帰ってきた。おそらくパスの弟だろう。僕らは再度ベースキャンプ近くの電鏡にアクセスしてから、それぞれのダイレクトリの変更に伴う、事前知識の収集や整理を行っていた。

「エアリアルー、あけおめー。ん、そちらの方は？」

「あけおめー、こちらの方はパインだよ。それに私は〇ネーム変わって『パス』になったからよろしく。」

弟くんはポカンとして状況を整理しているみたいだった。元氣そうな少年だ。

「初めまして、君、〇ネームは？」

「はい、テイマーです。イルカの研究をしています。明けましておめでとうございます。よろしく願います。」

とてもかしこまった様子で驚いた。誰かさんとは大違いだ。

「テイマー、寒いでしょう。着替えてご飯にしよう。私とパインで準備しておく。」

ベースキャンプは、ほとんどのものがない。環境が違うから一概には比べられないが、火星や、宇宙船の居住スペースの方が色々と充実していたような気がする。寒い冬の地上で過ごすのにも、さつき閉じ込められた流蘭が、弟とパスので2つ転がっているのと、コンパクトなテーブルと一体型の調理台。この二つのアイテムを積み込める移動用のカート。携帯する備品を除けば、たった3種類の家具しかない。

「それにしてもベースキャンプのアイテムが少ない気がするんだけど、地球の人つてみんなこれくらいの規模で生活しているの？」

「うーん、私たちの生活スタイルはそんなに珍しいわけではないけど、少ない方かな。私もテイマーも空とか海にいる時間がほとんどだから、ベースキャンプの設備はこれくらいあれば十分なんだ。」

確かに言われてみればそうだ。

「それにあんまり設備を集めてもスコアが必要になるし、ランニングコストもかかる。私たちはそんなに荒稼ぎしてないからこれくらい質素になっちゃうのよ。」

「そういえばトイレとかシャワーはどうするの？」

「あー、よく言われるんだ。トイレの設備はいいやつ結構あるから欲しいとは思ってるんだけど、銭湯とか公衆トイレがそこらじゅうにあるから。わざわざ買っていないんだよ

ね。」

「なるほどね、だんだんわかってきた。でもパスがいてくれてよかったかもしれない。何も揃えないまま城を出ちゃったから、きつと一人だと困ってたと思う。」

「うん、でも電鏡にアクセスすれば必要なものはすぐ手に入るよ。小さなサバイバルキットなら安く電鏡のストアから購入できる。注文したら、空輸で城から届けてくれる。」

確かに、さつき電鏡にアクセスした時に、その色々な機能を確認した。空から降ってきた火星人にも優しいシステムが揃っている。それに困ったら城に戻って、器鏡での生活を中心にすることもできる。

パスと話をしながら調理を進めた。今回の献立は年初めで、鴨肉を使った田舎雑煮とお餅だ。鴨肉は年末にその辺にいたのを弟が捕まえてきたらしい。下処理だけ済ませて冷凍されているのが調理台の中に転がっていた。食事の準備ができた頃、ティマーも身支度を終えて、焚き火の前であつたまつていた。

「ティマーお待たせー、お雑煮できたよ。」

テーブルにパスと二人で座って待っているところに、軽やかなステップで近づいてきた。3人揃ったところで揃って食事を始めた。鴨とゴボウの引き立った、濃い地球の味が

する。僕の知っているお雑煮は、鶏肉の出汁とゆずの香りがするやつだ。こんなお雑煮もあるんだ。

「田舎雑煮初めてだ。地球での食事初めてだ。美味しい。」

「『メタネーション』では雑煮、食べなかったの？」

パスが言った。

「田舎雑煮はね。それに器鏡だと味がするだけで食べたうちには入らないよ。」

それもそうかと相槌を打っていた。その間弟はお餅と格闘していた。

「あ、パイも早くお餅食べた方がいいよ。外だしすぐ冷めちゃうからお餅かたくなっちゃう。」

そう言われて、お椀の底からお餅を引き上げようと思ったが、すでに張り付いていた。

お餅を食べるのに箸を握る指先も次第に疲れてきて、食べ終わる頃には、自分の顎の感覚がなかった。これが地球のお正月。せっかく念願の地球に来られたのに、辛いことばかりだ。

「ふう。ごちそうさまでした。食べるのにずいぶんと時間がかかってしまった。お待ちせしてごめんね。でも、とてもおいしかった。」

「いや、全然大丈夫だよ。ほら、洗い物貸して、お椀にこびりついたお餅とるの大変なんだ。私がやっちゃうよ。」

そういつてサツと箸とお椀と取り上げられて、あつという間に洗い物が片付いてしまった。その間に、ティマーはお茶を淹れていて、素晴らしいコンビネーションだった。

「さて、お茶も入ったし、作戦会議をしよう。私もディレクトリ変えたばかりだからね。パインはこれからどうする？」

確かに、それは決めなければならないことだった。なんとなく思い描いている計画はあるのだけれど、地球にはあまり詳しくないものだから、どうしようかと思っていた。あつたかいお茶を飲みながら頭を悩ませた。すると隙を見計らってティマーが聞いてきた。

「パインさん、本当に火星から来たんですか？」

「うん、そうだよ。実は生まれてからずっと、火星にいたんだ。それで先月に初めて地球に来たんだ。」

ティマーはじつとこちらを見ていた。目の底まで照らすような純粋な視線だった。何かおかしいことを言ったのかと気にしてしまった。彼は二十歳くらいの少年だけれど、妙に大人びた雰囲気があるから、もっとカジュアルに接した方がいいのだろうか。

「ふーん、さつきドローンレースに出たいって言うていたけど、それはマジなやつ？」

「パインが話を進行させた。」

「ああ、火星にいるときに、地球で行われているドローンレースの動画やラジオを聞いて育ったんだ。向こうだとあそこまで派手なレースやエンターテインメントはなくて、子供の頃から出場するのが夢だったんだ。ドローンレースってエアクラフトを器械の中から操縦するから、火星から地球のクラフトを操縦できたらいいんだけど、まだ火星と地球間のリアルタイム通信技術は確立されていないから、地球に来たんだ。」

「それには、いつでるの？」

「お茶碗の奥からパインの目がのぞいている。タイマーは、美味しそうにお茶を飲んでいく。」

「出るって言ったって、まだ飛行機もないし、作れるだけの技術も、スコアの余力もないんだ。いつか出たいとは思っているけど——。」

「えー、そしたら私ずっと、盆栽を弄る火星人の写真を撮らないといけないじゃん、飛行機のほうがいいよ。」

「盆栽だっていいじゃないか。それに自分で決めたディレクトリなんだから、僕に文句言えられても困るよ。」

パスは不満そうな表情を浮かべている。でも確かに、いつまで経っても盆栽相手にしているのは退屈かもしれないし、いつになったらレースに出られるのかもわからない。

大人二人がうんうんと頭を悩ませているところで、ティマーが口を開いた。

「困ったら、おばあちゃんに会いにいったらいいんじゃない。」

おばあちゃん？

「おばあちゃんって、ずっと前に城の上であつた、あのおばあちゃん？」

城の上で会つたおばあちゃん？ どうやらパスにも心当たりがあるみたいだ。

「案内所にいたおばあちゃん。」

そう聞いて、パスは閃いたような声を出していたけれど、訝しい顔をした。

「あのおばあちゃんね、でも、なんでも屋さんなわけではないでしょう。あのヒトは城の博物館の学芸員さんじゃないの。」

「でも困ったときはおいでつて言つてたんだ。」

なんだか必死に訴えているところが可愛かつた。というかそもそも、そのおばあちゃんは僕の知っているヒトと同じかもしれない。ちゃんと喋れるのか。安心した。

「僕も一回その人に会つた頃ある。城の案内所で。」

「なるほどねー。まあ、他にいい手が浮かばなかつたらいつてみよう。やらないよりは、

やった方がいいし。それにお正月の間は、初詣とかで、ヒトが地上に集まってくるから城は空いているでしょうし。いいかもね。」

「そもそも他の手といっても情報はどうやって集めるのさ。」

「私たちは、大量のデータアクセスができるデバイスを持っていないから、城か電鏡を使つて調べ物をするしかないね。まずは、出るドロウンレースを決めて、エアクラフトを作つて、出場までの必要経費を稼ぐ。基本的にはこの流れだね。」

「エアクラフトを用意するとしたら、誰かに作つてもらうか、人工知能の力を借りながら自作してみるかのどちらか。パスとテイマーには、作れそうな心当たりのあるヒトはいない感じ?」

二人は互いに目を見合わせてから、肯定的ではない素振りを見せた。いないのか。僕も作れないかと思つて、二週間くらい城の資料を見ながら、エアクラフトの作り方は調べていたけれど、わかつたことは、作るのに膨大な技術と時間がかかるであろうということだけだつた。

「でも面白そう、飛行機を作るために奔走するのを追うなんて、ドキュメンタリーみたいだ。それも、ディレクトリは盆栽の管理つて、いいネタになるわ。パインの動き次第で私のスコアの稼ぎも変わってくるから、いっぱい撮れ高が欲しいわ。」

パスは役柄を演じるのがうまそうだ。一昔前のライターみたいな雰囲気醸し出している。

「そうだな。運命共同体ってわけだ。」

楽しそうに話していると、ティマーも嬉しそうに微笑んでいる。まあ、何にせよ一個一個やっていくしかない。それに地球にこれだけでも、嬉しいことには違いないんだ。レースにも出たいけれど、やりたいことは山ほどある。

それから、膨れた腹が落ち着くまで、作戦会議をした。ティマーのディレクトリのこととか、僕がどれくらいのプライバシーをパスから確保できるのかということだ。

「じゃあ、パスはパインさんのストーリーカーってこと？」

ティマーは言葉の意味をわかってる上でとぼけているようだった。

「いや、そんな言い方しないですよ。これはれっきとして研究であり探求なんだから。」

「つまり、変態的なストーリーカーってこと？」

あどけない少年は追い討ちをかけていく。

「余計なことを言ってしまった——。せめてパラッチとかにしてよ。それにお互い合意

の上なんだから。」

「僕は合意したつもりじゃないんだけど——。」

ボソツと声が漏れてしまった。

「新年になったらエアリアルがあ、『変態ストーカーパス、スラッチ』になってしまっていたんだ。どうしよう。エアリアルはどこにいつてしまったんだよー。」

地球に来て一つわかったことがある。この少年と組めば、パスに對抗できそうだということだ。流石に気に触れたのか。ムキになったパスが、ティマーを追いかけて回した。イルカだけじゃない。ヒトをいのようにコントロールする術も持っているらしい。すごい少年だ。僕も子供の頃はどうかだっただろうか。火星にいる子供たちもエネルギーに溢れているし、きつと少年つていうのはいつ何時もすごい奴らなんだろう。

感心してはいいたものの、ついには弟も捕まってパスにコテンパンにされていた。じゃれあいにしてはなかなかの迫力だった。

「さて、お腹も落ち着いたことだし、僕は散歩がてら、盆栽の扱いを勉強してくるよ。あと、お願いがあるんだけど、今日はここのベースキャンプに泊まってもいいかな。」

遠くでティマーにジュウジュツか何かの寝技を決めているところで、パスが叫びながら許可してくれた。

「全然いてくれていいよ！あんまり移動されると私も撮るのが大変だからね。」

テ（変態ストーリーカーパスラッ——）

パ「うおりゃー！ー！」

この戦いはしばらく終わりそうもない。巻き込まれると面倒だったので、近くの電鏡まで向かった。

寢床がなかったので、電鏡で寢袋を買うことにした。スコアの手持ちが少なかつたから、なるべく安く済ませようと思っていたのだけれど、流蘭は複数個あると便利だという話を聞いていたので、それに応えることにした。荷物の降下地点をパスとティマーのベースキャンプに設定した。他にも盆栽用のグッズを探したが、今日作業するまでには届かないみたいだった。それに長く使う道具になるとしたら、城の専門店で直接見て買いたいと思う。それから、赤松や盆栽のデータを更新、取得して、実際に近場にある赤松の盆栽へと足を進めた。

移動距離は片道10kmほどと、かなり遠くだったが、今朝使ったクローラーをもう一度使いたいとは思わなかった。急ぐ理由もないし、初めての大地を散策するのは楽しかった。決して失神したのがトラウマで怖くて乗りたくないわけではない。それでも『虫の知らせ』を追いながら、道なき道を進んでいくのは大変だった。時々、動物の気配もして、慣れない環境に気疲れした。

なんとか重たい体を引きずって、目的地にたどり着いた時には、それが赤松であるとすぐにわかった。よくみる針葉樹のツンツンした葉っぱに覆われている橙色の皮の幹の大本が現れた。そこら辺に生えている真っ直ぐ天に伸びていく松とは違って、長い長い時間をかけて、風の形を纏ったかのような姿だった。その不動の大本は、僕と向き合って、静かにいろんなことを語りかけてくれた。

気がついたら、メモ帳の見開きいっぱいその姿を写していた。ディレクトリの仕事的には全くスコア稼ぎに反映されないことだけれど、とても有意義な時間だった。どれくらい時間が経ったかもわからなかったので、描くのに満足してからは、ディレクトリに当て

られていた仕事に取り掛かった。

ありがたいことに必要な道具はそこに追いてあった。あまり状態が綺麗なというわけではないが、各地の道具を整備するのも僕の仕事の範疇だ。

まずは、軍手をして、盆栽の周りに落ちている松ぼっくりを拾った。たくさん落ちていることから、ずいぶん長い間放置されていたことがわかる。たくさんの松ぼっくりが集まった。なんだか幼稚な仕事に思えてくるけれど、案外楽しさを見つけてしまう。松ぼっくりと言ってもひとつひとつの形が違って、個性的なものもある。あとで集めたものを並べ比べてみよう。

次は指定された範囲の草をむしっていった。これで綺麗な景観になる。これくらいなら、機械にやってほしい気もするけれど、今は冬の時期で他にすることもまだなかった。枝を切つて、見栄えを整える剪定という作業も、初日からやる勇氣はなかった。

松ぼっくり拾いやら、草むしりをしていると、急に嫌な気配を感じた。カメラの音だ。ついにパラッチが来たらしい。火星人として恥じないように仕事に集中した。

「ねえー。気がついてるんでしょー。無視しないでよ。」

一瞬声の方向を見て、また作業に没頭した。向こうも絡むのを諦めたのか、盆栽周辺のモチーフをひたすらカメラに収めていったようだ。

地面の様子も整ってきたところで、目の前の大木が夕暮れに照らされてきた。赤松の幹がより赤さを増していく。ヒトの手の入った自然の造形物、それが何十年、何百年と変化してきた歴史をその体に刻み込んだまま、目の前にただ立ち尽くしている。夕暮れと風に揺られるその姿は揺らぎ続け、僕の意識が虜になっていく。隣にパスが歩み寄ってきた。

「綺麗だね。私、ちゃんと盆栽を見たのって初めてだよ。」

「うん、綺麗だ。」

その場に腰を下ろして、二人で樹を眺めた。冷たい土の上で、少し冷えるけれど風の音が心地いい。また明日になったらこの樹は照らされて、また違う景色を見せてくれるんだろう。

「今までたくさんの夕焼けを撮ってきたけれど、夕焼けに照らされる世界も綺麗だね。もつというんなものが撮りたい。」

「そうさ、火星人を追っかけてカメラのボタンを押している場合じゃないよ。」

不貞腐れたようにパスが立ち上がった。

「火星人を追いかけていなかったら、知らなかった景色でもあるんだ。そんなふうに言ってもしばらくはやめないからね。」

呆れたように相槌を返した。まあ、別に言わないけれど、綺麗な景色を誰かと一緒に見られるっていうのは僕も嬉しい。

世界が闇に包まっている頃、僕らは帰路についていた。帰りは、行きよりも早く感じるというけれど、暗闇の森を進むのは、原始的な恐怖と緊張感を体に植え付けられる。ベースキャンピングに戻った時にはヘトヘトだった。

「やつと、ついた。疲れたよ。」

「だから、雪迎え使おうって言ったのに。」

「別に疲れただけで嫌だったわけじゃないさ。地球を満喫しているんだからな。」

「クローラー使いたくないだけでしよう。」

一応、否定はしなかった。昼間に飛びあがっただけで怖かったのに、暗闇の中を飛びたくない。

焚き火の前でティマーがお茶を片手にくつろいでいた。

「お二方、おかえりー。さつき空輪でパインの荷物がきたよ。」

ティマーの指のさす方向に、茶色い箱が置いてあった。サバイバルナイフを借りて、箱を破り去った。中には真空パックに詰められた『流蘭』が入っている。

「流繭、買ったんだー。これで三つ揃った。あれやってみようよ。」
寄ってきたティマーが嬉しそうにしている。あれってなんだ。

「繭が三つあれば、組み合わせで大きめのテントが作れるんだ。パインのも使ってみていい？」

僕もどんなものができるのか気になるので、快諾した。

二人の流繭を近くに持つてきて、パスが端末をそうさした。暗くてよく見えなかったが、白い繭の糸が解けて、みるみるうちに大きな塊になっていった。

「なんか塩おにぎりみたいだね。」

たしかに。表面の模様がふつくらしたお米みたいになっている。パスは引き続き端末を操作したまま、調理場の方へ移動していった。しばらくして『虫の知らせ』が寄つてきて、ところどころ明るく光はじめた。塩おにぎりから、神々しい高菜のおにぎりに変化していった。

パスが何かを抱えて帰ってきた。そのまま入り口を探してモゾモゾと繭のテントに吸い込まれていった。

「あ、一番乗りずるーい。」

続いてティマーが入って、僕も入った。そこには温温ぬくぬくの樂園が広がっていた。パスはテナントの中央で駄目になっている。

「すごい、めちやくちやあつたかい。」

「虫の知らせが電気を運んでくれて、大きなコタツみたいになってるんだね。」

ティマーも驚いている。外が寒かったのもあつて、しばらくいたらその快適さで出られなくなりそうだ。僕も腰を下ろしたところで、ティマーが何かを察知したのか。駄目になつてそつぽを向いているパスに近づいていった。

「あ！みかん食べてる。ずるい。」

ティマーがパスに襲いかかった。騒ぐな騒ぐな。

「ぬあー。これは、あたしんだよ。」

でも僕も食べたかった。蜜柑。

パスがティマーと揉み合っているうちに、みかんをパスしてきた。

「あ、パインにはあげるんだ。僕にはくれないんだ。」

僕も驚いてパスにもらつていいのか尋ねたが、パスの意地は悪かった。

「剥いて。」

「はあ？僕が剥くんだから、食べちゃうよ。」

それからティマーが泣きそうな顔ですり寄ってきた。

「一口ください。」

可愛い。可愛すぎる。よし。剥いちやおう。何個でも剥いちやおう。器鏡で剥いた記憶を思い出して、皮の中から甘酸っぱい房を取り出した。ティマーに半分あげた。

「ありがとうパイン。」

なんだこいつ可愛いかよ。二人でモサモサと蜜柑を頬張った。気がついたらパスもすぐ横にいた。

「剥いて。」

「断る。」

その後はなんやかんや、二人の分の蜜柑まで剥かされて、パスがたくさんの蜜柑を隠し持っていることが明らかになった。テントの中であつたまっている内に、疲れが押し寄せてきた。地上での最初の夜はよく眠れた。

朝になつて鳥の声に起こされた。テントの中には、パスが寝ている。ティマーはすでに

外で活動し始めていた。

「おはようパイン。今お茶淹れてるから待つてね。そこの桶に水汲んできたから、顔洗うのに使つて。」

この少年は隙あらばお茶を入れている気がする。将来は茶道の達人にでもなるのだろうか。桶に溜まった水を掬つて顔にかけた。今にも凍りそうな水が頬を覆つて、冷たい風に冷やされていく。これほど目覚ましに効くものはないだろう。おかげで初夢も何を見たのか忘れてしまった。まだ体の芯が温まつてないのもあつて、自然と焚き火の元に吸い込まれていく。

それにしても朝起きて、水を汲み、火の準備までしてくれる年下の少年が偉すぎる。僕は世話になりっぱなしで、何かお返ししてあげたい。

「はい、ハチミツ生姜茶だよ。あつたまるよお。」

「ありがとう、何から何まで。パスはいつもあんな感じなの？」

「そう、冬は特にね。僕は朝の準備をするのが好きだから全然構わないんだけど。」

いい子すぎる。純粹な善意と栄養たつぷりのお茶を啜りながら内臓にも一日の号令をかけていく。

そして、ここから地獄の正月が始まる。

梅ノ間

あれから何度吐き出しただろう。僕に受け入れられるものは一つもないと体が発狂している。最初の方は、吐き出すものがあつたはずだ。今はただ嗚咽と肺から搾り出されるわずかな空気しか出てこない。繰り返される嘔吐の動作を体が覚えていく。僕の体は壊れたカラクリのようにのたうち回った。

ゴポミウヴオロ——。

「パイン。大丈夫だからね。」

何を言っているんだパス、大丈夫なわけがないだろう。

あれから一週間は経ったか。それでも少し症状がマシになった方だろう。あの日は、地上の急激な刺激に多く晒されて、疲労も蓄積していた。そしておそらく決め手になったのは、ハチミツだろう。せつかくティマーがくれたお茶なのに、ハチミツ生姜茶を飲んだことで、重度のボツリヌス症に感染してしまった。

全く屈辱にも程がある。赤ちゃんにハチミツを与えてはいけないというが、火星の滅菌された世界で過ごしていた僕は、地球人の赤ちゃんと同程度の免疫力しか持っていないというこらしい。緊急用の薬やカプセルも効かなかった。虫の知らせによつて、電鏡から運ばれる救援物資でなんとか回復に向かつていった。

最初の二、三日の苦しみはこの世のものとは思えなかった。めまい、動悸、吐き気、意識が朦朧として呼吸もままならない。思いつく限りの苦しみを原料にしたミックスジュースと、ヒトの自我を並べたとしても、その二つにどれほどの違いがあるか、わからなかっただろう。

ボツリヌス菌は、自然界でも最強の毒の一つだ。高温でも、低温でも殺菌することができる。無酸素状態で増殖するともないやつだ。もし、火星人が地球に攻めてきたとしても心配することはない。ハチミツで退治することができる。僕は人類にとつて有益な知的財産を残すことができた。

体が全快する頃には、関東平野にも時々雪が降った。テイマーは責任を感じて必死になつて動いてくれた。気にすることはないと彼を慰めたが、きつと僕よりも深い傷を心に負つてしまったかもしれない。三週間ほどベースキャンプで療養して、その間に地球のい

ろんなことを教わった。まるで赤子が童話を読み聞かせてもらうように。

まだ地球に来てから1ヶ月と少し経ったくらいだが、その半分は城に閉じこもっていて、もう半分は寝込んでいた。これからやっと地球人として活動することができる。休んでいる間は、ディレクトリの仕事もパスが手伝ってくれた。もう盆栽の扱いについては僕より詳しいだろう。負けるわけにはいかない。

今は寒さに耐えて森で散策しながら、食べられそうな野草を探している。電鏡で何度も検査をして、地上で過ごすのに十分な耐性を体が獲得できたようだ。今は、痩せ細った体を少しでも動かして、自然のものを体に取り込む必要がある。理論上は健康な肉体の存在を確認しないとけない。冬は、自然の恵が少ない、食べられる葉っぱも、越冬のためにその姿を潜めている。

歩いていると小川の流れる音が聞こえてきた。もしかしたら、魚が釣れるかもしれない。魚影を探しに川をのぞいてみた。綺麗な川だ。だが、揺れる水面に映る自分の姿に嫌気がさす。地球に来て自分の姿は、妙に痩せ細ってしまった。幸の薄そうな灰色でギョロついた目を持つ地球外生命体の様。もう少し健康的に。地球人らしくなりたい。

とりあえず、持っていた釣り竿を垂らしてみる。木の影や流れのある場所、岩の隙間に

竿先の餌を投げ込めば、うまく釣れるらしい。

なかなか釣れない。地面から餌になりそうなミミズや虫を掘り起こして嫌々ながら針先につける。根気よく竿を投げ入れる。時々餌がなくなる。水でふやけて流されたのか。魚に餌だけ取られているのか。

釣れない。寒い。

ゆつくりと上流に向かいながら糸を垂らすポイントを変えていく。音を出さないように静かに歩く。川の魚たちは音に敏感らしい。天敵は僕らのような鈍臭い生き物でなく、鳥だつたりするから、川の魚釣りは難しいとテイマーが言っていた。自分の影を水面に移さなないように、忍びながら進む。

釣れない。

ん？ 釣り上がらない。

糸が川底に引っかかってしまったみたいだ。思いつきり引っ張ってもびくともしない。どうしたらいいんだ。ムキになつて引っ張っていると、針が飛び上がるように出てきて、頭上に広がっていた木の枝に引っかかった。地球が釣れた。

場所を変え、上流へと登っていくうちに川の流れの広がった場所に出た。小さな滝がいくつか重なっていて、美しい場所だ。草むらをかき分けながら、なんとなく良きな場所に腰を下ろして竿を伸ばしてみた。まあ別に釣れることを期待しても仕方ないと脱力したまま、一息ついた。釣れた。

竿先に重みを感じて、反射的に竿を引く。糸を持ち上げると15cmくらいの魚が宙にぶら下がって暴れていた。慌てて、草むらに竿先の魚を下ろして、両手で襲いかかった。必死に息をしている体は暴れて土まみれになっている。初めて命の感触を指先に感じた。ひどくぬるぬるしていて、思いつきり掴んでないと滑る。小さな体のわりに大きな目だ。その奥から何かを訴えかけてくる様な気がする。針を外したいが、どうしたらいいかわからない。釣り糸を持ったまま呆然としてしまう。次第に魚は動かなくなっていた。目の前

で命が消えていく。糸の先に宙ぶらりんになっている命の入れ物。

何かを間違ったのかもしれないと困惑した。おかしいことはしていないはずなのに、魚が捕まったのは、僕の責任じゃない。考えるのをやめて、指を魚の口元に突っ込み、なんとか針を外した。

とても美しい魚だ。茶色と赤色のグラデーションの中に、いろんな大きさの楕円模様が浮いている。これから僕は、この美しい生き物をどうするんだ。食べるのか。この豊穣の世界で、わざわざ捕まえて、殺して、喰らうのか。

動揺して手が震えた。滑る魚体が指先から力無く地面に落ちていった。そして膝を曲げて捕まえようとした時、魚は爆発したかのように跳ねた。魚はあつという間に川の中に逃げてしまった。

川のせせらぎが綺麗だ。これで良かったのかもしれない。

ベースキャンプに帰った。荷物は出発した時と変わらない。むしろ少し軽くなったか。日がほとんど落ちて、空の色が薄い白と紫色で包まれている。

「ただいま。」

パスが背中中の荷物を下ろしていた。しばらくつきつきりで看病してくれたから、気晴らしに空に飛びに行つていたらしい。

「おかえり、私もちようど今帰つてきたところだよ。なんかとれた？」

「いや、全然。」

「どうかしたの。元気ないじゃん。まだ体調しんどい？」

簡単に今日の話を話した。主にさっきの釣りの話だ。なんだか神妙な雰囲気になつてしまつたけれど、パスは真剣に聞いてくれた。魚一匹で感情的になつてるのが馬鹿らしかった。でも止められなかった。暗くなつて、目も震えて、前がよく見えない。

パスが肩を抱いてくれた。背中を叩くな。骨に感情が響いてくる。

「次は、もっと早く終わらせる——。」

震える声を無理やり吐き出した。

「うん。そうだね。」

背中を叩くのをやめて欲しかった。

真つ暗闇に包まれて、体も冷えてきた。

「パイン、火つけようか。」

パスに肩をゆすられて我を取り戻した。ベースキャンプの隅に貯めてある枝を抱えてきて、小さく折った。そして枝を積んでいるうちに、パスが着火してくれた。ゆっくり火が大きくなっていく。薪に火が移った頃には心身ともに落ち着いていた。

いつも通り夜を越して、今日は海城ブランドにいく日だ。だいぶ時間がかかってしまったけれど、案内所のお婆さんにもう一度会いに行く。食事をして身支度を整えて、火元を消した。

「準備終わったよ。」

ティマーが軽快なステップで寄ってきた。相変わらず気持ちのいい少年だ。

「オッケー。じゃあ出発。」

パスに連れられて歩き出す。移動方法については、昨日相談した。ティマーが、ヒトをイルカで運べるって話をしていたのが気になっていたのだが、海上が寒いのと城までが遠

いから今回は別の手段を使うことになった。

「ロケーションはこの辺で合つてると思うけど、見当たらない。クロローラー。」
結局、雪迎えだ。

1ヶ月前に乗つて失神したのを最後に使っていない。

「あんまり気乗りしないけど、慣れるしかないか。」

「なーにへなちよこなこと言つてるの。今回は城までの移動だからゆつくり動くの、大丈夫だから信じて。」

パスが言うには、城に行くときは、ロープウェイの様に移動するらしい。確かに、蜘蛛が糸を辿つていくと言うならそんな怖い思いをしなそうだ。

「さ、乗るよ。」

それぞれクロローラーの横から乗り込んだ。3人とも体を固定してからすぐに動き出した。この前乗った時ほど急激ではないが、素早く高度を上げてから水平に移動し始めた。それでも加速するうちはかなりののどだった。速さが安定して、居心地になれた頃には、陸を離れようとしていた。水平線の先に陸が消えてしまうと、少し不安な気持ちになった。ほとんど見えない糸の上を機械の蜘蛛が走っているんだ。次の瞬間落ちるかもしれない

い。そんな不安が常に付きまとう。一方、御二方は平気なようで、海の景色に飽きてウトウトしていた。相変わらずキモが座っているというか、すごい余裕だ。

それから結局一睡もすることなく遠くに聳^{そび}える海城プラントが近づいてきた。冬で空気が透き通っているのもあつて、その姿は陸からもうつつすらと見えていたが、近づいていくと凄まじい迫力がある。これほどの構造物が天まで伸びているのは、技術的に当たり前になつたとしても、生物として畏怖を感じる。

この城のほとんどは、小さなモジュールの集合体であり、それが無限に近いほどの数が積み重なってできているらしい。モジュールの一つ一つは磁力で接続されており、そのために必要になる膨大な電力を海底の『核融合発電所』で賄っている。それでも城の上層部に積もる雪に押しつぶされずに、その形を保つのは想像を超えた力が働いているんだろう。城の仕組みについてもあとで詳しく調べてみたい。

そろそろ二人を起こそうと思つたが、二人ともすでに起きていた。

「わあ、起きてたのか。」

「うん、体内時計でなんとなくわかるのよ。」

パスが得意気にいった。

雪迎えの終点は、城の中層部に接続されていた。近づくほど、どんどん登っていく。少しクローラーが傾いて緊張感が体に走る。程なくして終点に到着した。思ったよりは時間がかからなかったし、水平線を眺めているのも悪くなかった。地球は、火星と世界を構成しているパレットの色がまるで違う。一面の青い世界は気持ちがいい。

クローラーを降りた。入り口のところで、いくつかのスカンを受け入城した。

「ほら、案外大丈夫だったでしょ。」

渋々、肯定した。今日のパスは機嫌が良いみたいで何よりだ。まあ、いつも鼻につくくらいには、元氣か。

それから、城のあれこれを眺めながら、上層に進んでいった。時々、目についたお店にパスが引き寄せられていったが、テイマーがなんとか制止していた。見始めたらキリがないと、特に一回でもそれを許すとパスが止まらなくなってしまうらしい。まるで本当にテ、ム、しているみたいだ。動物じゃあるまいし、困ったやつだ。僕自身も、広告と店先の誘惑に耐えないといけないくらいには、興味をそる場所だった。そして、何回もエレベーターを乗り換えて、時々気圧の変化に、耳の内圧を狂わせながら、懐かしの『雉の間』に辿り着いた。

「ふうーやつとついた。雪迎えは寝てるだけでもつくから良いんだけど、人も多いし城は

大変ね。」

「これでお店を周回していたらもつと大変だよ。でも今日はパスがちゃんと我慢できて偉い。」

弟に褒められて、満更でもない感じだった。なんだか、本当にやばい方はよわい齡十やそこらの、この少年な気がしてきた。

「それにしても、ここの盆景は壮観だね。確かにディレクトリに選びたくなるのもわかる気がする。」

パスは僕が倒れているうちに、盆栽の周回管理を手伝ってくれて、少しずつ興味が湧いてきたみたいだ。同じ興味を持つてくれる仲間がいるのは嬉しい。はたして『仲間』なのかどうかはわからないけれど、あまり気にしないことにした。

ティマーはキヨロキヨロしながら、案内所を探して、スキップするように人混みをかき分けていった。どうやら案内してくれるらしい。虫の知らせみたいだ。

案内所は以前きた時と変わらない印象だった。桐箱がそこらじゅうに積まれていて、物腰柔らかなお婆さんがちょこんと座っている。ティマーに追いついて、お婆さんにいざ話そうとおもった。しかし、肝心の何を聞けば良いのかを考えていなかった。お婆さんは戸

惑っている僕を見たまま、待つてくれた。焦らなくていいよと、目が伝えていた。

「えっと。飛行機を作りたいんですが、どうしたら良いかと思つて——。」

咄嗟に口から出た言葉があまりにも突拍子なくて、自分でも呆れてしまった。今のを無しにしたい。

それでもお婆さんは全てが承知であると言わんばかりの表情だったが、その口からは何も出てこなかった。僕たちは、話すべき言葉を思いつかなかつた。けれどその場に立ち尽くした僕らは不思議と落ち着いてしまったから、そのときつと時間は止まつたのだらう。お婆さんの目と、その表情と、体、まつている不思議な雰囲気と、周りの四角い入れ物。それらの間を行ったり来たりした。お婆さんも同じ目の動きをしていたのかもしれない。時々、パスとタイマーにも視線を向けた。目が合う時もあつたし、合わない時もあつた。そしてついに痺れを切らした世界が、お婆さんの口を開かせた。

「今のあなたたちはきつと、三人で一人なのよ。それに一人だから、生きていくのは大変そうね。でも、こんな私の言葉は気にすることないわ。間を埋めただけの波に過ぎないの。」

そういつて、一枚の紙を用意してくれた。パスが紙を受け取った。

「三浦半島、城ヶ島じょうがしまだつて。」

テイマーが紙を覗き込んで苦い顔をした。

「城ヶ島、危ないところ。僕知つてるよ。」

お婆さんは、楽しそうに微笑んでいる。さあ、おいき。お婆さんの柔らかい覇気は段々と遠のいていった。僕らは、自然に後退りながらお婆さんに別れを告げた。しかし妙な時間だった。ここは随分と高いところだし、気圧でも低いのだろうか。そもその場の雰囲気、に不思議を覚える。軌道エレベーターから城に降りたばかりの時は気にしなかったが、しばらく地上にいたことで、この空間の異様さが際立つ。

目的を果たした僕らは、一度腰掛けられる場所を探した。上層は資料が置かれているばかりで、雑多な空間と、知恵を貪る人に溢れていた。彼らに無意識に押し除けられるように中層に降りた。

「あ、ここのお店に入ろうよ。」

雑居ビルのような狭苦しい場所を通っていると、テイマーが僕の裾をひっぱった。その先には年季の入った暖簾と、入れるのかと怪しく思うほどの小さなドアがあった。

「ここはなんのお店なの。」

パスも来たことはないようだった。

「こつてこてのラーメン屋さんだよ。たまにくるんだー。おいしいよ。」

僕の中の何かがピクンと反応した。

「ラーメン。あの、伝説の——。食べたい。」

思わず出てしまった言葉に、二人は笑っていた。火星でもラーメンの存在は噂に聞いていて、器械のメタネーションでも何度か食べる機会があつた。しかし、今この壁の向こう側にラーメンがあるという事実が心に躍った。

「よし、入ろう。」

パスの背中に重なるように3人とも店内に入つていった。

「いらつしやい——、どうぞ。何にいたしやしようか。」

店主の掛け声の元、お品書きを見ながら意識を泳がせていた。いったいどれを選んだらいいんだ。胃袋は許さないうが、自分の中にはこれをいつべんに頼みたい欲求がある。パスとテイマーはそれぞれ注文した。僕は悩んだ末に、ラーメンと数々のトッピングを要求した。店主は困惑した様子だった。ずいぶんと長くなつてしまった呪文のような注

文に店主は文句を言っていた。

それから程なくして、我々の眼前に大きすぎる器と、大迫力と説得力の塊のような食べ物が現れた。これが、夢にまで見た伝説の食べ物。ラーメン。その風貌に心を奪われているうちに、隣の二人は釣り上げられた深海魚顔負けの表情で、麺を吸っていた。

店内は、麺とスープがブラックホールに吸い込まれていく音が響き渡っている。これ負けじと指先と味覚に全神経を走らせた。ここは戦場だ。異論はないだろう。数々のトップピングにスープが浸透していくのを尻目に、麺にスープを絡めて口に運んでいく。

これだ。これが本物のラーメンだ。脳内の発火が連鎖する。

ズルズルと吸り続けた先でスープに浸かった具材を味わう。すかさず麺を吸い込む。

スープを一口飲んで追い立てる。究極のハーモニーだ。隣の二人も正気の沙汰とは思えないオーラを放っている。

「いやー、美味しかったねー。」

「ごちそうさまですうー。」

パスとティマーが順々に店から出てきた。僕はひと足先に食べ終わっていた。火星人の

枯渴した体は新品のスポンジのようにラーメンを受け入れた。ラーメンが全て、僕になった。

「さて、お腹もいっぱいになったし、城ヶ島、いつてみよう。」

だがあまりにはち切れそうな腹を抱えた3人は、腹と昂った気が収まるまでひと休みしてから、雪迎えのクローラーに乗り込んだ。

三浦半島までは、初めてエ、ア、リ、アルと出会った時と同じように、バルーンクラフトのパイロットに運んでもらった。雪迎えでいくよりは早く移動できるかとも思ったが、上空にDDが浮かんできた時は移動よりも回収が優先されるので、結局かかった時間はたいして変わらないと思う。上陸には空から降りるのかと覚悟していたが、外気温が低かったのもあって、ラダーで降りられるくらいの高さまで降下してくれた。ただ、バルーンクラフトから下ろしたラダーが、節を進むごとに揺れるので、ロープで降りるのはまた違った緊張感だった。

「ふう、みんな降りれた。」

全員が上陸して、パスがヘリコプターに合図している。バルーンクラフトから気持ち

のいい音が聞こえてきた。どうやら挨拶の音標識のようだ。移動に際したコストもそこまで高くない上で、ここまでのサービスをしてもらえるのはありがたい。ただ、隣にいるティマーは虚空を見つめているようだ。

僕とパスはディレクトリの都合上、移動インフラを使うから消費するスコアが低い。しかし、普段イルカに乗って移動している分、ティマーの移動コストは高く取られてしまったようだ。

「ほら、いくよ。」

背中を小突かれたティマーだが、まだ少し悲しそうな目をしている。愛しのイルカたちに会えず、空飛ぶ妙な機械に乗るのは、そもそも気が乗らないのかもしれない。

城ヶ島に降り立った僕らはひとまず探索してみることにした。上空から見ると、きりたつた崖に囲まれた島だったが、降りた場所は開けた広い丘だった。パスが遠くに見える塔を見つけてくれて、塔目指して歩いている。

「なんだか天気悪くなってきたね。」

「うん、雲行きが怪しい。雨に濡れるのは別に構わないけど、できれば雨宿りできる場所を見つけないね。」

そう言ったはいいいけれど、この辺には背の高い木もなければ、人の気配もない。せつかくの病み上がりで風邪をひきたくはない。

歩いていくと塔の近くに奇妙な鳥が現れた。鳥というよりも不自然に宙に浮かんでいるから人工物のようだ。まさか機械自然の構造物だとも思えない。丘から林に差し掛かって、林を抜けると平原が広がっていた。そこで塔の麓に人影が見えた。どうやら鳥に見えた謎の飛行物体は人が操作しているみたいだ。とりあえず、視界の遠く先にいるその人に話しかけてみることにした。

かなり近づいたところでようやくお互いを認識した。そこにいたのは綺麗な白髪の老人だった。背が高く姿勢の良さもあって、歳を重ねた人には見えなかった。

「こんにちは。」

ティマーが最初に声を上げた。僕らも続いて挨拶した。老人は目を見開いて、中立的な表情をつくっていた。

「どうも、こんにちは、どうかなさいましたか。」

「この島に来るように言われて、散策していたところです。飛ばしているものはなんです

か。」

どうにかこの旅の続きの糸口を掴みたいところだ。

「これは、^{すがた}紐ヌイ風と言つてな。鳥の形をした風だ。ここはいい風が吹くから風を飛ばすには絶好の場所だな。やつてみるかい。」

老人は風を僕らに渡してくれた。糸先の鳥が風に乗って、あつという間に上空へ四羽の鳥が浮かんだ。風に引つ張られていると、この前の釣りを思い出す。これは僕が釣られている側なのか、それとも釣っている側に変わらないのか。どちらにしても、生命の危機を思わせるような強烈な引きではなかった。もつと優しくて気持ちのいい引きだった。隣で二人も楽しそうにしている。

「わしは千^{ちうね}畝ネという。よろしく。」

左手に糸を掴んで片手を開けてから握手をした。すごく強い手だった。

すると握手をして互いに名乗った一瞬のうちに、バランスを崩した風が墜落してしまった。千畝さんの風は依然として気持ちよく浮かんでいる。糸をたぐって風を回収しにいった。歩いていった先から見ると、パスの飛ばしている風がとても安定して飛んでいた。普段から風と戯れているだけはある。僕が戻るうちに二人とも挨拶を済ませていた。

「こんな場所に人が来るのは珍しいよ。それでも景観はいいところなんだが、世の中は一体何をやっているのやら。ところで、君たちはここに来るように言われたと言っていたが、どなたに勧められたのかい。」

太く落ち着いた声の主だ。強い風がふいても自然と耳に入ってくる。ティマーがスッと前に入ってきて口を開いた。

「城の案内所のおばあちゃんです。僕らは飛行機が作りたいんです。」

千畝さんが喋った後だと、ティマーの高い声がより際立つ、それに言うのを渋ってしまいうこともサラッと伝えてしまう。相変わらず可愛らしくて頼りになる。千畝さんは微笑んでから物思いに耽りながらいった。

「ほお、不思議なこともあるもんだね。飛行機か。それはたいへんなこつた。——こんなところで話していても仕方がない。雨も降りそうだ。」

千畝さんは風を引き寄せて手に収めた。パスは気がついたらその辺を走り回って風を飛ばしていた。よほど気に入ってしまったんだろう。ティマーが走って確保しにいった。

僕らは千畝さんに連れられて、その場を後にした。塔のすぐそばにある急な坂道を降りていく。昔は階段だったのだろうけれど、林の中に不揃いな間隔で足場があるだけだ。坂

道を進んでいつて林から出ると、黒い岩場が現れ、その先に広がる大洋が広がっていた。広い岩場の先には大きな洞穴が見える。

「凄まじいじやろう。岩場の底を覗きにいつてみ。」

パスはそう言われる前に岩場を跳ね回っていた。

強い風と、濡れた足場に注意しながら、ティマーと二人で岩場の縁までいつてみる。

「わあ！」

ティマーも驚いている。岩場の先は崖になっていて、そこには打ちつける波が渦を巻いていた。渦というよりもむしろ蛇の戸愚呂のような邪悪さを持っている。

「イルカたちはここに近づかないんだよ。波の流れがよめなくて、すぐ岩場に打ち付けられそうになるんだらうね。でも魚たちには絶好の隠れ蓑になつてる。」

「詳しいね。」

まあねと、返事をして千畝さんの元に戻っていった。できればもう少し渦を見ていたんだけど、あんまり待たせてもいけない。パスを道連れにして、千畝さんの後に続いた。

僕らは、潮風から逃れるように小さなた洞穴に入った。奥に進んで、波音が遠のいてい

く。床には所々明かりが落ちていて、道には迷わなそうだ。

「ここは昔、太平洋戦争で使われた軍の基地だった場所だが、先人が使いやすくしたかったのか、随分と掘り広げられてな。迷うといけないから灯りに沿って歩いておくれよ。」

中は寒く、異様な気配がある。言われなくても余分な行動はしない。いつもは爛漫なパスも息を潜めている。

「ほれ、ここがベースキャンプじゃ。あまり居心地がいいとはいえないが、適当な場所に腰掛けてくれ。」

非常用の電灯に小さなストーブが照らされている。他にも雑多に色々なアイテムが転がっているようだ。なんとなく僕らは3人固まったまま、空間の中央と思しき場所おぼに腰を下ろした。千畝さんはストーブに火を起こした。洞窟の空間内にカチャカチャと音が響き渡る。かろうじて聞こえてくる海の音と、風が通り抜けていく反響音で包まれていく。

「ここは冷えるだろう、少し待つておれ。温かいものを何か淹れよう。コップか何かはあるかね。」

僕らも腰につけてある竹の器を取り出して目の前に掲げた。僕もハチミツでダウンして体調を整えている時に、自前の食器類を竹で作っていた。

すぐに用意ができた様で、僕らの器にとろした液体を注いでくれた。

「さあお上り、この辺でとれた魚達と浜大根のマース煮。薄めてあるからスープも飲めますよ。」

いい香りと怪しい香りが混ざったような飲み物だった。いただきますと呟いて汁物を口に運んだ。さつき強烈なラーメンを食べたあとで、また妙なものを口に入れている。それでも嫌な感じはしなかった。千畝さんもちびちびと飲んでいる。手持ち無沙汰に音へ耳を傾けながら、事象が進行するのを待った。

「単刀直入に言おう。わしは飛行機をつくれる。いや、現行でつくつているところだ。」

一瞬にしては長い時間、言葉の意味を理解するのに脳が動いているのを感じた。一体どういうことだ。まず飛行機をつくろうと思った、困つているところでダメ元の人伝いを頼りにした。そしてどうやら、この方は僕らの望みを叶えられるらしい。一番最初にリアクションしたのはパスだった。

「つくれるって、本当ですか。」

「だからつくつていと言っている。背後をご覧。」

次の瞬間、マース煮が宙を舞っていた。

「うぎゃあ！」

パスの動きに驚き苛立ったが、平常心で振り向いた先、パスを許した。これはそうそう耐えられないだろう。巨大な顔があった。というよりは大きな獣が鎮座していた。明かりが薄くて今まで気が付かなかった。

「ほれほれ、慌てるんじゃないよ動きやしない。全く、また掃除かのお。」

千畝さん、これに關しては同情できない。暗闇の中で、大きな顔に見つめられているのに気がついたら、正氣を失ってもおかしくはない。そういえば、万病を驅逐し、卓越した医療技術を持つ地球人も、突然の恐怖に対応する術は持ち合わせていないらしい。これは地球人（主にパス）を倒すためのいい参考になる。

「これはみたところ梟ふくろうの様ですが、飛行機ですか？」

ティマーが僕らの疑問を口にしてくれた。平然と目の前の現実を受け入れているようだ。

「そこに気がつくとは嬉しいねえ、梟に外観も似せてあるのだよ。これはエアクラフトの一種でな、林の中で飛び回れる梟を参考に設計しているんじゃない。静かに飛べる上に凄まじい機動力を誇る。まあ、まだ完成はしとらんがの。」

ホーツホツホと梟のように笑つて見せている。色々と疑問が浮かんだったので、僕も聞いてみる。

「千畝さん。飛行機が必要というのは僕の望みでして、ドローンレースに出たいんです。このエアクラフトはレースでも使えますか。」

老人は目を見開いた。まんまるの二つの黒目が本當の梟の樣だ。

「ほう、そう畏^{かしこ}まらんでも良い。呼び名は好き^かしてかまわんよ。ところでレースに出たいとは困つたものだ。この機体はアクロバットとか山林での使用を想定している。ヒトが乗るものだ。レースといつたら今どき人が乗るものでもないじやろう。」

確かにお爺^{おや}さん^{さん}のいう通りなのだろう。骨組みが見えて、中にヒトが乗るコックピットのようなスペースが見える。

「器械から操作できるようにはできないんでしうか。」

「いや全く問題はない。できんことはないよ。ただレース用となると色々と氣を揉む機能をつけなければならんだらう。撃たれたり撃ち落^{おち}したりとな。それに、開発には時間もスコアもかかるから大変じゃぞ。」

弱つたな、確かにその通りだ。エアクラフトがあることはありがたいが、やはり難しい。

「でも乗れるんならこれで出ればいいじゃん。私、空ならいつも飛んでますし。グライダーで。」

パスが口を挟んだ。簡単にいうがドローンレースがどんなものかわかっているのだろうか。

「頼もしいのお。グライダーとは珍しい、案外こやつをうまく乗り回せるかもしれないな。それに、実はこの機体は電子制御機構をほとんど持たない上に、仮に電波が届かないような場所でも動かせることを想定してある。だからハックされるリスクは、現状の設計でもかなり低い。わかるじやろうか。」

軽く頷いてからまた 聞いてみる。

「レースに出たいというのが目的ですが、出るからには勝ち残りたいです。この機体は飛ぶ上でどうでしょうか。」

「遅い。他の機体に比べて恐ろしく遅いだろう。足元にも及ばんよ。じゃが機動力はピカイチじゃ。ハチドリのようなやつがない限りな。レースにそんなヘリコプターみたいなやつは出てこん。スピードがものをいうレースでなければ、あるいは勝てるかもしれない。」

そんなレースあるわけ。

「24 Twist Grand Prix…」

「優勝と言わなければあるいは。な。」

パスの答えに、お爺さんが不敵な笑みを浮かべている。『24 Twist GP』は24時間耐久のレースで、海城プラントの周りのコースを飛行し、周数を競うレースだ。飛んでいる間に多くの機体がクラッシュしてリタイアする。うまく飛びながら周数を稼いで、最後まで飛んでいれば、確かにいいところまではいくかもしれない。

「次のレースは半年後だ。それまでには仕上がるが、どうする？」

少し悩んだ素振りが出てしまったが、体はもうわかつていた。出たい。夢にまでみた機会だ。

「出たいです。」

「そうか。」

お爺さんは深く頷いて、大きな錘おもりを受け止めるような仕草をしている。

「24時間ひとりでは飛べないでしょう。私も出たいよ。」

「お二人さんはいいコンビじゃのお。」

どうやらパスと出る算段がついてしまった。タイマーも物欲しげにキョロキョロとしている。この可愛い子も何とかしなくちゃいけない。そう思っているとお爺さんが続けた。

「もう決まったな。だがこちらにも頼みがある。少年をレースまで借りたい。もちろん本人が良ければじゃが。」

えっ、と声が漏れて、パスとタイマーの顔に小さく不安が持ち上がった気がした。

「タイマー大丈夫？」

「具体的にどんなお頼みですか。」

タイマーが落ちていた声で聞いてみる。

「エアクラフトの整備に手間かかる。手伝いが必要でな。それに、レースで勝つには飛ぶだけじゃ難しいじゃろう。外から墮とせる役目も必要になる。なあに悪いようにはせん。自然の目もあるし、すぐそこにいつも電鏡はある。心配はいらんよ。」

パスはその表情が固まってしまったが、特別断る理由もないだろう。一応声をかける。

「パス、大丈夫？」

「大丈夫。タイマーはいい？」

「イルカ達が一緒ならいいよ。」

お爺さんはフラットな表情で頷いている。

「この周りは海じゃ、流れもいい場所があるから問題はないだろう。ディレクトリ探求の邪魔はせんよ。」

こうして、僕はレース出場に一步前進した。

「それとも一つ、頼みがある。欲張りなジジイで悪いのお。年上のお二人には、レースまでの期間でなるべく多くの『渦』を集めてきてほしい。」

渦？ ですか。僕はイメーজするのに十分な理解力を有していない。

「『渦』じゃ、ぐるぐるじゃ。こんな具合の。」

妙なお爺さんは、酒瓶を取り出して指差した。ラベルには渦巻いた模様が ついて いる。

「これは、北陸の方の酒でな。わしは酒はやらんのだが——。それはそうと、渦を集めてほしいというのは、本当に何でもいいのだ。さつき岩場の波を見ただろう、あれも渦じゃ。水のサンプルを揃えてきてくれてもいい。写真でも、絵でも。巻貝でも何でも。ぐるぐるして いる ばい の じゃ。」

言っていることはわかるのだけれど、いまいちその真意がわからない。ひとまず僕たちは二人は要求を受け入れた。

「ほお、よかった。これは楽しみじゃ。どんな渦でも良い、たくさん頼むぞ。届けるには

何でもかまわん。電鏡で送ってくれてもいいし、大福を飛ばしてくれてもかまわん。」

「大福ですか？」

僕が心当たりがなかったのだが、お爺さんは箱を手渡してくれた。

「これは新型のDDじゃ。より小さく折りたためるように設計してはいるが、容量は従来のものより多いぞ。それに安全に輸送できる。数が足りなくなったら連絡してくれば良い。」

なるほど、あの案内所のおばあちゃんが選り分けていた桐箱。貴重な物品を運んで城に届けるためにコレが使われていたのか。薄い灯りの中まじまじと箱を観察していると、視界に棒が伸びてきた。

「それと、これも持っていきなさい。わしの作った尺八じゃ。」

尺八？いらな、いや何なんだこのお爺さんは。小遣いの代わりにはは大掛かりなものばかりくれて困る。

「尺八ですか？あの楽器の。」

お爺さんは鼻から息を吹きだして自信たっぷりの様子だ。

「これは尺八と言っているが、同じなのは発音構造だけだな。伸びるのだ。如意棒みたい。」

そう言つて、50cmほどの棒が警棒のように伸びて、倍以上の長さになった。

「これが最大の長さで、好きな長さにできるぞ。穴が空いているだろう。その穴を塞いだりあけたりして音を変えるのじゃ。これの面白いのは、長くなったら穴の位置が変わるのじゃ。遠くの穴には指が届かないが、もともとある穴が塞がつて、センサーになる。センサーに指を置くと対応している遠くの穴が塞がる。」

なんだか面白いものではあるが、その価値がいまいちよくわからない。

「これは何のための機能なんですか？」

「低い音を出すために決まつてではないか。長いと野太い音になるぞー。」

そう言つてお爺さんは尺八モドキを吹き鳴らした。それは荘厳な音の響きで、まるでこの洞窟全体が鳴っているかのようだった。

「どうじゃかっこいいだろう。でもなあ、これを尺八のディレクトリをしている人たちに見せたら、伝統を軽んじているとか言われて、しょぼくれてしまつてのお。誰かに使つてほしいのじゃ。まあ長さも変えられるし、吹かなければ物干し竿にでもしてけれ。」

そう言つて震える手で渡してきた。わざとらしい演技だったが、面倒な気持ちを悟られないように受け取った。試しに吹いてみたが、筒の中を息が通り抜けただけで、お爺さんが鳴らしたようにはいかなかった。お爺さんは愉快になっている。

「ほっほっほ、一日吹いていれば鳴るようになるから色々試してな。それにこれも『渦』じゃ。吹いていれば渦と仲良くなれるぞ。」

別に渦と仲良くなれなくてもいいのだが、隣で必死に吹いているパスはもう渦と仲良くなってしまった。

ベビエブオオオオオン――

「すごいのお、鳴らしおったか。さすがは空を飛ぶだけはある。風の流れをつくるのも造作もないか。」

「ふええ、クラクラするう。」

強く息を吐いて酸欠になっている。何だか可笑しくなってきた。タイマーも必死に吹いているがまだ鳴らせずに、奮闘している。

「長い棒は何かと便利だからいいかもね。チャンバラもできる。」

パスがそう言つて、首元まで尺八を伸ばしてきた。そうか、これからコヤツとの戦いが始まるのか。

「これこれ、人を叩くもんじゃない。」

三人は『のびる尺八』をゲットした。

こうして、導かれた場所で取引を終えた僕らは、エアクラフト整備チームとパイロットチームで分かれた。あまり気にはいなかったが、火星から来たばかりで、飛行に耐えられる体を持っていない僕は、半年で体を鍛えなければならぬ問題を背負っていた。

そして僕とパスは『渦』を探す旅にでる。